目次

社會と教化（時言）……本多日生
釋尊の大恩……本多日生
實學……山根日東
日蓮主義より見たる無量義經……井村日威
記事報道十數件……
法華經要文講義……本多日生
那先比丘經通解……本多日生

第廿六年六月號

名古屋靈山寺の經師參百遠忌法要

大正十一年五月廿二廿三日參行

上圖　天童行列境内に入る、天童の先頭を進むは川島常照師、同中央左側を進むは見玉常宣師。

下圖　同上本堂に昇らんとす、正面本堂向拜に立てるは見玉常宣師、其の背後に立てるは國友日斌師。

時言

社會と教化

本多日生

社會教化の方針

そこで教化の方針はどうしたら宜いかといふ問題でありますが、是が尤も大切な事で、教化の必要を自覺したからと言つてもやり方が惡ければ、却つて又そこに害が起るやうな事がある。唯だ必要を覺りさへすれば、宜いといふものではない、如何にすれば我國の教化方針が立つかと申しますれば、私は之を時間の上から考へ、又之を社會を構成して居る所の横から見た根本の原理に遡つて研究すれば宜いと思ふのであります。是は佛教の教義から言へば緣起論と實相論――社會を緣起して來た所の歴史的の方から考へるのと、社會そのものを平面に見てその實相を抑へて考へるのとの二つであります。

この場合に私は先づ時間の緣起論の方から考へて參ると、世界に色々社會といふものがあるやうだけれども、今の人類の文明には國家を離れての社會

といふものはないのである。國家を離れた所にある社會は、非常な野蠻な何も文明を持たぬやうな亞弗利加見たやうな所はどうか知らぬけれども、多少ともそこに文明の意味を持つて居るものは、亞米利加にしろ、英吉利にしろ、日本にしろ、國家に從屬して居る所の社會であつて、國家から離れた人類の社會といふものはない。人類といふ言葉や社會といふ言葉は假設的の言葉であつて、總ては皆國家に屬して居るものである、それ故にその國家には歴史があり、國家には國の初めから淦ゆべからざる因緣關係を持つて來て居る、この歴史的なる關係を社會より離す事は出來ない。西洋では社會革命を唱へて、今迄ある歴史をぶち切つて新たなる社會を建設するなどといふことを言ふ、或は大改造などと言つて、無暗に社會を造り替へるといふけれども、それは或る程度の事を修復する位の事は出來やうけれども、この國家に屬して居る所の、全體の社會と稱するものは、西洋で言ふやうな革命的な事をやるべきものではない。何故やるべきものでないかといへば社會といふものは珊一體と稱して、一つの體見たやうなもので、それに生命を持つて居る、今日の社會學から研究しましても、社會といふものは有機體のものである。丁度之を人間に例へて見ると分る、人間を病氣があるから療治するといふことは出來る、治療する事は出來るけれども、すつかり臟腑を出して仕舞つて、或は腦髓を出して仕舞つて、造り變へて仕舞ふといふことになつたならば、その時に於てその人間は死んで仕舞ふ、どんな荒療治をするからと言つても、或る程度の所を修復するのであつて、この命まで殺して療治をするといふことはない。社會といふものは生命を有つて存續して來て居るものであるから、決して左樣な荒療治をして臟腑を引出して、死んでも構はぬといふやうな亂暴な事をやるべきものではない。社會革命とは丁度さういふ亂暴なやり方である、それ故にその損害が非常に大である。例へば露西亞なら露西亞のやうなことをやつたら、その破壞の結果は一寸元の狀態に戻すことは出來ない。西洋では革命々々と言つて非常に善い事のやうに考へて居るけれども、革命といふものはその損害とその效果を判斷する時は非常な損害であつて、決して學ぶべきことではない、況やその社會が非常な立派な生命を持つて居る、所謂善良な風俗習慣を維持し來つて居る社會ならば、之を破壞すべき理由は少しもないのである、成るべくその系統的なるものを保存して更に發達を期さなければならぬのである。丁度人間の體にした所が、之を大事にして益々健康にして發達せしめなければならない、「どうもこんな體は詰らぬから」と言つて自分の體を棄てゝ仕舞つて、新しいものを取らうとすれば、それは最早や自分ではない、他人である。

所が日本はこの社會を構成したる所のその狀態が、所謂建國の始めより非常な立派な理想的なものて出來て居るのである。古い時分に國が開かれたけれども、不思議なことに日本は非常な善き考に依つて國が造られた。歐米諸國は國を造る始めには碌な事を考へては居らぬ、殺き合ひをして他人の豚を取つて來るとか牛を取つて來るとかいふやうなことて、所謂掠奪をして大きくなつたものが遂に國の形をなしたので、その元を洗ふといふと非常に穢ないものてある、故に建國の始めといふやうなことは十分之を明かにする

ことが出來ない國家が多いのであります。所がこの日本のみは全くそれと違つて居つて、既に小林先生からもお話があつたことゝ思ひますが、非常な立派な意味に依つて日本は出來て居る。そんな殿り合ひをして出來たものではない、第一に神樣がお開きになつたと言はれて居る。それが事實どうであつても構はぬ、吾々の祖先が三千年間、日本の國は尊とい神樣に依つてお開き下さつたと信じて今日まで來て居る、國民の三千年間貫いて居る所の大信仰である。この事實のほぜくりなどはどうても構はぬ、神樣に依つて開かれたといふことは日本人が今日まで誰も疑はずして來た所の國民的信念である、この大信念は非常に尊といものである。神樣がお開き下さつたものならば殿り合や穢れた精神で來たものではない、神樣といふは非常に美しい、道德的理想的の精神に依つて國の始めが開かれて居るものである。さうしてその御育として皇室を戴いて來た、皇室は非常な美しい德を以て今日まで來て居る事も事實である、又それを國民が心を一にして翼けなして來たのも、我が歷史の美風である。この建國の事實、國體の精華といふものは實に現想的に來て居る、是は今更幾ら考へても淪ゆべき必要が少しもない。之を淪へんならぬといふやうな事を言ふのは、自暴自棄の考で、何等根據のないことである。自分一人の利益の爲に權利の爲に、この尊とい國體を呪ふといふやうなことは、旋曲りの不料簡のものでなければ、考ふべきことではないのである、少しばかりの學問をしたからと言つて、それが鼻に附いて、この偉大な國體を呪ふやうな氣になるのは、餘程頓馬な奴である。國の成立ちから國家の目的、國家の理想、國家の活動、國家の起源といふことを國家學的にお調べになつたならば實に日本は理想的なものである、洵に結構な國である。

そこへ精神的文化が起つて、最初から神樣の御教といふものがずつと續いて居る、細かい事は仰せられぬけれども、そこに三種の神器がある、殊に鏡をお傳へになつて、日本人は皆心を鏡の如く磨けよといふことを仰せられた。この一つでも是は永世淪ゆべきものではない、只今申す所の社會と教化といふことも、神樣のお言葉にある所の先づ以て心を鏡の如くせよといふことが、社會教化の大方針である。それ一つが實行せられても事は足りるものである。理窟を並べる學問が流行つて來たものであるから、何か社會と教化と言へば箇條を並べてほぜくりんならぬやうに考へて居るけれども、根本の大理想といふものは、先づ人々が本然の性に歸つて、己れの心を鏡の如く清く磨き上げたならば、それで大抵の問題は解決されて仕舞ふものである、心が一旦曇つて仕舞つたならば、後に幾ら好い法律上の理窟や經濟上の議論があつて見ても、曇つた同志が寄つたならば何もなりはせぬ。『軍人への勅諭』にもお示しになつて居るが如くに武勇とか禮節とかいふこの五ケ條の事を行はんとするにはどうしたら宜いかと言へば、一つの誠心が大切だと仰せられた、軍人精神のやうな美しい立派な忠勇の精神を發揮するに就ても、元の誠心に歸らんければ駄目だ、『心誠ナラザレバ如何ナル嘉言モ善行モ皆ウハベノ裝飾ニテ何ノ用ニカハ立ツベキ、心ダニ誠アラバ何事モ成ルモノゾカシ』と仰せられた、この誠心といふは鏡の如き精神である。この教が本になつて日本はずつと來て居る、だから日本人は西洋人が言ふやうに理窟を並べて、ゴチャ〳〵議論見たやうな言

譯見たやうなことをやつて行く國民ではない、天地に愧ぢざる所の堂々たる精神を以て、さうして大抵の問題はその清い精神に依つて不言の間に解決を附けて行くのである。長たらしい議論を闘はしてゴチャ〳〵言ふやうな眞似をする必要はない、面倒なことを言はないても宜い、もつと本當の精神に戻りさへすれば、萬事は論ぜずして解決せられるやうな美しい社會が出來る。西洋の事を一も二も美いやうに思つて大勢寄つて蝟つてガヤ〳〵言うて多數決ナンと言つて、頭數の一つても多い方で物を決めるといふやうなことをやつて居るのが、非常に立派なやうに考へて居るけれども、それも大した事ではない、その事が惡いとも言はぬけれども、さうさへすれば好く行くものと思ふのは間違つて居る。それよりも國民の心を鏡の如くする、教化を徹底せしむる方法を以て世の中を善くする、この大方針大政策を忘れぬ方が尊といのである。

そこへ又支那大陸の大なる文明が日本に渡つて來た。支那は今日は頽廢の狀態に居るけれども、四千年の文明を有する偉大なものであつて、その聖賢の教が日本の文明に融合せられて來た、是は吾々の先人又諸君の先祖が皆學んだことであるが、聖賢の學がこの日本の歴史を彩つて來たのである。楠公が出たのもその感化である、山鹿先生が出たのもその感化である、吾々の先人の遺蹟は聖賢の學が與へた所の結果である、非常な好き影響を與へたのである。それは何がその中にあるかといふと、是れ亦實に尊といものであつて、大體は「天道明德、仁義忠孝の教」と言つて居るが、人には皆本然の明德がある、心が誠にさへなつたならば、必ずしも學問しなくとも理窟を學ばなくとも、人には偉大なる誠心の光に依つて大抵の事は分るやうになつて行くものである。所謂「良知良能」といふものゝあることを說いた、丁度猫は別段教育をしなくても鼠を取ることが出來る、魚は泳ぐ稽古をしなくとも自由に泳ぐが如く、人は人の道として道德的生活が出來ると聖人は教へた。この天道明德の教を本にして、人間の誠心が開け、その誠心の中に仁義忠孝の華が咲く「仁」は多くのものを愛する所の精神であり、「義」は宜しきに隨つて働く所の精神である、親切が本であつて、さうして事に當つて緩急宜しきを制して行くのである。その緩急宜しきを制する中に、第一に現れるものが君に忠、親に孝といふ道德となつて來る、それから廣く及べばそれが社會全體の博愛の精神になるけれども、先づ以て忠孝を教へた。西洋の倫理學に於ては、天道明德仁義忠孝といふやうなはつきりした概念を與へるものは無いと思ふ。西洋では近頃自我實現といふやうなことを云つて居るけれども、その自我を十分に吟味しない。東洋では自我に物慾と明德とを分けて居る、煩惱があり佛性があると謂ふ、荒魂があり和魂があるといふやうに、自我に二つの意味を分けて、善き方面を發揮せんければ駄目だと注意して居る。所謂

心こそ心まよはす心なれ
心に心心ゆるすな

人間の心は本體としては一つだけれども、作用は二つに働いて出る、清い方に働くのと濁つた方に働く

のとこつてある。

ともすればかき濁しけり山水の
すませばすます人の心を

と先帝の御製にある如く、澄ませば清い精神になるけれども、濁せば直ぐ泥水のやうな精神になる、そこを注意しなければならぬ。それを注意しないで自我を突つ張れと言ふ、濁つて居らうが澄んで居らうが構はぬ、俺の權利ぢや、俺の利益ぢやと言つて、縱に放僻邪侈の精神を働かさうとするのが西洋文明である。そんな愚なことは聖人の學にはない、先づ己れを修養し訓練して清きものとして、それを世の中に行ふのて、己れを淨めずして我儘の精神を突つ張れといふやうなこと程、間違つた行き方はないと教へたのが、聖賢の學てある。

西洋は其點の注意が足らない、倫理學をやつても自我實現と謂ふ。その自我とはどんなものかと言へば、先づ人間の本能は自己保存の本能とか、榮養の本能とか、種の保存の本能とか言つて、食ふことゝつるむことゝ自分を保護するやうなことを以て人間の本能と解釋して居る。てあるから近頃は實に甚しくなつて、「性」といふ字ても書いたならば、男女關係のことばかりと思ふやうになつた、聖人の學に於て「性」といふ字を書いたならば、本然の性か、氣質の性か、といふ風に、道德的な感を起したものてある。それ程に西洋文明は自我を低級に見たのてある。「本能」といふやうな言葉ても、儒教から言つたら良知良能だと考へる、所が西洋の學問をやつた者に本能と言へば直ぐ卑しき欲望と考へる、さういふやうに違つて來る。そんな低い自我實現を振廻して、それが經濟論と結んて勞働問題とか民衆運動となつて行くから、世の中が混濁になるのてある、それを初めから警戒して掛つて居るのが聖人の學てある。之を今我が社會の系統的文明から言つたならば、吾々の祖先はそれに依つて、この社會を維持して來たのて、吾々の血の中に吾々の心の中に、この氣分が流れて來て居るのてある。その外色々結構なものが聖賢の學から現れて美しい社會を造つたのてある。

もう一つは是も古く欽明天皇の時代に印度大陸の文明が支那を通じて日本に來た。印度は今日の狀勢から見れば衰退して居るやうてあるけれども、思想の文明に於ては、世界第一と稱せられるので、六千年の文明を持つて居るものてある。西洋の文明は二千年といふけれども、眞の文明は漸く二百年程前から開けたのてあつて、精神的の文化は東洋が西洋に先立つこと四千年も古いのてある。さうしてこの印度文明は今日は十分研究する人がないから、傳つて居るけれども、そこにあつた所の哲學、宗教、道德、總ての精神的文化は、世界文明の最高なる意味を持つて居るものてある。それが幸に早く日本の文化に輸入せられて、殊に聖德太子の如き偉人が出て、この偉大なる佛教を我國の文明に能く融合せられた。是は途中から融合したのてはない、日本の文化はそれより前にあるやうてあるけれども、その時分には言葉も文字もはつきりしないやうな素朴な文明てあつて、文字となつて書物に現れる頃には最早や佛教が入つて居つたの

てある、それ故に『古事記』てあらうが、日本書紀てあらうが『斯ういふ風に字て書き出した時には、この中にはモウ早や佛教の思想が含まれて居る。中途から飛込んだものだと思つて居るが、さういふものてはない、日本の精神文化を開く始めから、佛教は關係を持つて居るものてある。その佛教に又非常に善いものがある、大體哲學風の智慧て進んて行く側と、宗教の信仰て行く側と、それから實際道德の側、即ち人間の心て言へば智情意の三方面が佛教に於ては一つに纏められて居るのてある。西洋は哲學は希臘に起り、宗教はヘブライに起り、道德は又ずつと後に宗教から分離して起つて來たのてあつて、西洋の文化は知識の側と宗教の側と又道德の側とが、始めから反目嫉視して現れ、今日に至るまて融合を遂げ得ないのてあります。西洋の文明を批評するものは、基督教の文明が衰へて、希臘の文明が勝つたといふ、そこに物質文明が勢力を得たとか、科學の文明になつたとか言つて居るが、そんなことてあつて、宗教が威張つたならば科學の文明を抑へ込んて暗黑の時代を造り、又科學が盛んになつたならば宗教を押込めて唯物的な文明に偏よるといふやうなことて、西洋の歷史を大觀すると總て失敗てある。細かい事は幾ら善かつた所が駄目ぢやないか、偉大なる長き歷史を傳うて來る間に、宗教に進めば知識を盲目にし、知識に進めば冷酷なる文明になるといふやうな大失敗をやつては、その中間に幾ら大人物が出て見ても駄目ぢやないか。然るに佛教は之に反して最初から釋迦の頭腦が既に大哲學者てあり、大宗教家てあり、大德教の先生てある。希臘の哲學者は宗教のことなどは顧みはせぬ、始めから疑ひを抱廻はしてほじくつてといふやうな風て、哲學者は面倒な理屈ばかりを言ふて人心の教化は考へて居らない、何でも知識ぢや、眞理ぢやといふやうなことて來た。釋迦如來の如きは非常な大なる哲學者てあり、大なる宗教家てあり、大なる經世家てある、即ち一變すれば大政治家てあり、一變すれば大學者てある、それが圓滿な大覺を得て佛陀となつて教を立てたが故に、彼れの教の中に流れて居るものは、眞理もあれば、宗教もあり、道德もあれば、國家社會を思ふ所の經世眼もあつて、非常な偉大な精神が調和されて現れて居るのてある。それ故に釋迦の門人の中には大なる學者もあれば、宗教家もあつて、あらゆる者が包容されて居る、大きな國王てあつても釋迦の前には教を聽いて居る、決して宗教家だと言つて迷信的のものてはない。佛教の歷史を御覽なさい、印度の十六大國の國王が皆釋迦の教に信服して居る、又どんな大哲學者と雖も釋尊の教の前には降服して居るてはないか。さういふやうな譯てありますから、その教が日本に來た始めの聖德太子も非常な立派な宗教的の人てあり、道德的の人てある、哲學的の人てある、非常に偉い方てある。傳教大師を見ても矢張りその通りて、學者てあり宗教家てあつて、さうしてこの日本の國家の經營をも考へて居る所の人てある、弘法大師もさうてある、日蓮上人もさうてある、唯の坊さんや唯の宗教家てはない、皆國を思ひ眞理を愛し、又溫かな信仰を敎へて行つた人てある。

さういふ風にしてそれが各々互に調和するかと云へば、是が又非常に能く調和を取るので、西洋のやうに宗教と道德といふものは一致が出來ぬとか、さういふやうなものてはない。佛教をやつた人は皆儒教を

やつて居るので、日本に儒教が盛んになつたのは、大體皆坊さんの力でやつたのである、傳教大師が儒教を知らぬとか、弘法大師が儒教を知らぬとか、そんなことは問ふだけ野暮の話である、皆聖賢の學に長じたる大先生である。聖德太子もさうでありますが、菅原道眞公もさうである、德川光圀卿もさうである、日蓮聖人もさうである、日本文明を代表すべき大偉人といふものは、皆我が建國以來の神道の教も、聖賢の學も、佛教の教義も皆合せ成したる人だ、その人を模範人物として日本の文化は開かれて居る。さうして、その精神は朝廷に入つて居るから、朝廷には神道の教も、聖賢の教も、佛教の教も皆尊重してお在でになる、今日でも朝廷の思召はそこにある、一般民衆の考もそこにある。之を大多數の國民に聽いたならば、佛教を日本から棄つべきかと云つたならば「ノー」と答へる、儒教はどうか、矢張り「ノー」と答へる、儒教を棄てゝ宜いといふやうなことは言はぬ。儒教の『大學』だけしかやらぬやうな人は佛教を見ないで、韓退之の『佛骨の表』位見て佛教の惡口を言ふ、是は青表紙を少ししか讀まぬ者である。國民に之を聽いて見よ、それはお前は『大學』だけしかやらないからである、古來の達人は三教融合の主義であつたし、朝廷の御精神もさうである。日本の總ての家庭を御覽なさい、佛檀を持つて居らない家庭は殆んど無い、『論語』や『孟子』を持たない家は無いのである、又神道の教は言ふまでもない、皆日本人は伊勢の大廟を尊敬して居る。

この三つの系統から流れて來た歴史的文化は今日棄つべきか棄つべからざるかと考へた時、如何に西洋の學問をしたからと言つても、この神道の精神、聖賢の教、佛教の教、この大精神を棄てることは出來ない。この大きな考を根本に定めたならば、マルクスがどう言つたとかクロポトキンがどう言つたとか、さういふやうな一學者の說を直ぐ取つて來て騷ぐ必要はない、是等の精神的文化に合せざるものは、容易に日本に採用は出來ない、何も學者の手を煩はす必要はない。この歴史的文化を體系的に整へて發揮して行くといふことが教化の方針である。この中の一つに閉ぢ籠つて他を擲つといふことはいかぬ、神道をやるからと言つて佛教や儒教の惡口を言ふやうな人もあり、又儒教だけをやつて『論語』に依つて佛教の惡口を言つたりする者があるけれども、それはいかぬ、又佛教に偏して儒教も國體も忘れるやうなものはいかぬ。

それからもう一つ更に實相的に考へた時どうかといふと、社會といふものは社會學の上から研究して見ても、又その他の社會問題から研究しても分ることであるが、社會は相倚り相濟けて行かなければならぬもので、社會といふ言葉が、既にこの字を見ただけても、互に相倚り相濟けて組立てられて行くべきものであることが分る。人間が大勢集つてさうしてこの世の中を組立てて居る以上、相互の都合の好いやうにといふ相互主義でなければならぬ、社會とは相互主義である。個人の自己の都合を以て他の差支を顧みないといふことでは、人類の社會が構成さるべきものではない、相互の幸福を考へ、相互の利益を考へ、相互の差支のないやうにして行かうとするのが社會構成の原理である。さうすると相互の都合の好いやうにとい

ふことはどうしたら出て來るかといふと、自分の都合を先に立てた時には必ずや相互の幸福は得られるものではない、それ故に先づ讓歩するといふことが原則でなければならぬ。寧ろ東洋で言ふ所の所謂「溫良恭儉讓」といふ、讓るといふことが社會を造る原理である。西洋のやうに要求するといふこと、權利を主張し利益を主張するといふことを以て社會を構成せんとするならば、如何なる社會政策を行はうとも、如何なる施設をやらうとも、それは結局失敗である。是は大勢のことであるとちよつと分らぬやうだけれども、部分の人間で考へて見たら直ぐ分る、諸君が五人なり十人なりて物を組立てて見たら分るてせう、相當の教育のある者と雖も、自分の都合からのみ考へて行つた時には、直ぐ差支を生じて來る。「今夜晩飯は何にしようか」といふことを一つ相談して見給へ、「俺は天麩羅が宜い」と一人が言ふ、「いや俺は天麩羅は嫌ひだ、鮨が宜い」、「いや僕は西洋料理だ」、「いや俺は蒟蒻で濟して置く」、さういふやうになつたならば中々面倒なことになつて極りはつかぬ、「いや僕は蒟蒻が宜いと思ふけれども君が天麩羅を取らうといふならおつき合をする」、「いやそんなら僕も天麩羅を止めて蒟蒻にしよう」というやうに、自分の欲する所を犧牲にして他の者に讓らうといふ美風を以て造れば、非常な美しい社會を造ることが出來る。それを一々自我を主張して、「馬鹿なことを言へ、俺は蒟蒻より外のものは食はぬ」、「ナーに俺は飽までも天麩羅だ」といふことを主張したならば直ぐ衝突である。社會を構成する原理も、權利利益の主張から行くが宜いといふことを西洋では强く言ふ、殆んど權利といふ言葉でなければ何ものも顧みられざるが如くに、今日文明の相場になつて居る、是が大いに考ふべきことではないか。吾々の先人が開拓して呉れた歴史的の文明の中に現れて居る事から判斷すれば、社會構成の原理は權利といふ言葉で解釋した所は一箇所もない、佛教七千卷の經典にもなければ、儒教の三千餘卷と稱する書物の中にも恐らくはなからう、神道の教の上に於ては言ふまでもなく權利といふやうな言葉は認めることは出來ない。是が無いとすると餘程考へなければならぬ。政治家でも學者でも、西洋で善いといふことには頭からへこたれて、自から「西洋に心酔しない」と言つて居る人でももう早や宜い加減酔つ拂つて居る、何でも權利利益といふやうなことで今日は判斷して居るのである。併ながら社會はどうしても相互に扶け合つて行かなければならぬ、扶け合つて行かうとするには、己れは幾分か讓歩し犧牲になる精神から行かなければ社會の構成は出來ない。

のみならずこの共同生活を營んで行くに就ては、互に自ら人格を磨かなければならぬ。「俺の人格を尊べ」などと言つて人に要求するのではない、自ら人に粗末の事があつてはならぬといふ反省である、要求にあらずして反省である。こんな不束の者であつては、この仲間へ入つて貰つて何等貢献する所がない、他の御厄介になつて相濟まぬといふ反省の精神を以て、自分の責任を盡さうとする、反省の觀念、責任の觀念を先に立てて、要求、自負は後へ廻して掛るやうにして、社會を構成せんければならぬ、所謂道德的でなければならぬ。他の言葉を以て言へば人類の社會を構成する第一要件は道德である、道德とは何であるか、自己の權利を主張するにあらずして、寧ろ自己の責任を反省することであそ。

是は他のものに就て考へて見たら能く分かると思ふ。玆に砂を集めて之を結合せしめやうとしても中に結合しない、之を袋の中に入れて置いて見ても、決して一つにならない、各〻獨立して居る、壓迫されて居るから一つの物の中に入つて居るけれども、その袋を破れば皆分裂して仕舞ふ。個人主義は砂のやうなものであつて、互に自己を保存し自己を擴張しやうとして居るものである、であるから永遠に調和しない、法律であるとか經濟であるとかいふ袋を以て抑へて居るのであるから、それが破れたならば直ぐ分裂して仕舞ふ。そこで法律を以て抑へ、武力を以て抑へ、金力を以て抑へて行くので、西洋の今日の平和はそれである、所謂袋を被せてこの平和を維持せんとして居るものであるから、非常に難しいことになつて、破綻に破綻を重ねて來たものである。今後の歐米の狀態は望み少ない有樣であると思ふ、眞理の上から判斷して、あゝいふ思想が蔓延するならば、歐米の前途は決して幸福なる社會を維持することは出來ぬであらう、それは個人主義を力說して、自己の權利利益を主張し、それと相橫切らぬやうにと言つて經濟的に、法律的に、色々の袋を被せてやらうとして居るのであるから、直ぐ破れて仕舞ふ。それ故に勞働問題と雖も今日まで適當な解決は決して附いて居らぬ、利益の分配などと申した所が、どの程度に分配するのが適當であるか、是亦中々容易に治まるものではない。それ故に東洋の所謂道德的に、互に讓步し反省し合つて己れの責任を盡して行かう、時に依れば自分の生命財產を犧牲にしても同胞國民の幸福に盡さうといふ、これが日本の國民道德となつて居る、自己を犧牲にしても同胞國民の爲に貢獻しやうといふ大和魂、我國の

忠勇義烈、是は一方から言へば天皇の爲であるけれども、一方から云へば同胞國民の爲である。このやうな精神を持つて居る者は、丁度考へて見ると互に抱擁し合ふ性質を持つて居る所の、糯を蒸して柔らかにして、是が互に團結し合つてお鏡餅になるやうな風に、調和力を持つて居る國民である。吾々の祖先は左樣にしてこの團結を維持し來つたものである。西洋のは砂を袋に入れた國家のやうなものであるから、何處か一つ破れたならば直ぐ土崩瓦解して仕舞ふ。我が日本は元は糯の一粒一粒別であつたものが、抱擁してお鏡餅になつたやうなものであるから、幾らぶつけてもこの團結は破れない、是は社會を構成する所の原則に適つて居る國民であらうと考へるのであります。

之に就ては吾々が奉ずる所の釋迦牟尼の敎を見ますれば、洵に能く分かりますが、どうしても世の中を物質的に導いて低き慾望に流れて、その低き慾望を滿たさんが爲に、自己の利益を主張する所の世の中になつたならば、如何なる方法を執つても、決して平和な文明を造ることは出來ないといふことを、言はれて居ります。今の西洋がやつて居るやうな方法に於ては、決して理想的なる社會が實現されぬといふことを釋迦は斷言して居ります。私はこの釋迦の敎ふる所に基いて西洋の文明を考へますといふとどうも西洋の文明は失敗に終るべきであらうと思はれる。是は私の小さな考から申すのではありませぬ、世界第一の偉人、吾々の信仰から言へば如何なることをも達觀せられた如來の大覺の御敎の中から照らして見て、どうも西洋の文明は誤りに終るといふことが考へられるのであります。それは餘りに個人主義を主張し、權

利利益の精神を以てそれを要求する所の側から、四海平等の精神でも自己の人格を認めろと言つて、人に對して人格を認めさせやうとする所の主張で、自ら顧みて人格の缺けたる所を反省するといふ美しい道德に社會を導いて行かないからして、あゝいふやり方では、遂にこの社會をして失敗に終らしむるものであらうと思ふのであります。

尙この社會の實相論としては色々研究する餘地もありますが、先づ日本人としては釋迦如來の敎へられた事などは少くとも一つの參考に入れて、社會研究をやらなければいくまい。社會の研究と言へば西洋の社會學者とか、西洋の法律的、經濟的の學者の議論の精粕を舐つて、さうしてこの社會を健全にしやうとすることは、考の足らぬことではありませぬか。非常な立派な模範とすべき社會が西洋にあればそれも無理ないけれども、西洋の社會狀態は今日知れ渡つて居る限り不安の狀態に置かれて居るものである、それ故に吾々日本人の敎化の方針は、一つ變つた側から研究をして進んで行きたいと思ふのであります。

是は非常な大きな問題でもあり、面倒な問題でありますから、さう申しても尙ほ研究の餘地のあることではありますが、どうか諸君にもその點に就て深くお考へを願つて、今世の中で流行つて居る所の受賣の學說などに雷同しないやうに、御注意を願ひたいと思ふのであります。

（完）

敎化

釋尊の大恩

本多日生

今日は大恩敎主釋迦牟尼世尊の御降誕の聖日でありまして、我が統一團に於きましても淸淨なる僧俗相集り、淸き法要を營み、堂內に溢るゝお經の聲、題目の聲を以て大聖釋尊の御恩の萬一に報ひ奉つた次第であります。每も信者方の熱心は感ずる所でありますが、殊に今日はお題目の聲の勇しい點に於て、確かに來會者諸君の信仰が燃えて居つたことを認めて誠に愉快に感じた次第であります。元來正しい信心をする人はどういふものかお題目を唱へるにも遠慮したやうな風で、口の中でお題目を唱へるやうな人が多かつたのであります。所が今日は聲も惜まず、天にも響け、靈山の佛の御側にも屆くやうにと、聲

を張り上げて題目をお唱へになつたことに於て、私は非常に有難く感じた次第であります。

この頃は日本佛教各宗に於ても大いに目覺めて參りまして、宗派の如何を問はず、釋尊御降誕の聖日には全國到る處に於て、御恩報じの催しをしない所は無い程なことに相成りました、東京も今日は日比谷公園に於て盛大なる花まつりを催して、この御降誕の聖日を祝することに相成つて居るのであります。名古屋に於ても、京都に於ても、大阪に於ても、その他我國の相當な都會に於て、御降誕記念の會合をしない所は無い程に、今日は盛んになつて參りました、實にこれは民間の人達の考ばかりではなく、政府當路の人も、佛教の事はどうしても大切である、實にその人々の安寧幸福ばかりでなく、社會の秩序を維持する上に於ても、我が國運の健全なる發達を期する上に於ても、佛教の信仰は復活しなければならぬといふことの自覺を持ちまして、政府當局の人達もそれ〳〵内訓を下して、各地に於て佛教の燻んになるやうに力を盡されて居ることを、私は承つて居るのであります、遲れたりと雖も先づ氣が附いたことは洵に結構なことゝ思ひます。隣國の支那の方に於ては、國内がいろ〳〵亂れて居ります上に、最近は諸君の御承知の如くに、新聞の上にも見えて居りますが、非宗教的運動を標持しまして、宗教反對の運動を學生達がやつて、男も女もワイ〳〵騒いで宗教撲滅すべしといふやうな風潮を煽つて居るのであります。日本の新聞がそれを批評して、彼等は過激思想の爲に宗教排斥運動をやるのであらうと言つた所が、彼等は自ら辯明して言ふには、吾等は過激思想の爲に宗教を排斥するのではない、又外國の勢力を驅逐せんが爲に宗教を排斥するのでもない、吾等は吾等の學ぶ所の科學の知識に依つて宗教を排斥するのであると叫んで居ります。ちよつと言ひ分は良いやうでありますが、左程に科學を萬能に信ずることに於て、彼の不明なる所があるのであります、動機は科學の知識に依つて宗教を排すると言ふも、その結果に於ては過激思想の準備をすることになるのであります、最初は科學の知識に依つて宗教を嫌ひつゝある者が、終ひには科學萬能に趨り、物質慾にのみ墮落をしまして、墮落の結果は戰となり、暗黑となり、破壞となつて、悲慘な結果に了るのであります。それが見えないとすれば、彼等は頗る不明なる者であります。

我國も數十年前はそれと同じやうに、科學の知識に依つて宗教排すべしといふ事を、吾等の先覺者も言うて居つたのであります、所が昨今は目醒めまして、どうしても宗教は復活しなければならない、それには釋尊に復らなければならないといふので、驚げな自覺ではあるけれども、先づ以て釋尊の御降誕の日一日だけでも之を祝さんければならない、三百六十四日は無信仰でも、三百六十四日は無宗教でも、せめては四月の八日だけでも掌を合さなければならないといふことに相成りました。まだ甚だ微弱な自覺ではありますけれども、併ながらこの一日を祝することに依つて、次第々々に佛教に近づく事が出來て、正しい信仰が燃えるやうになつて參りますれば、洵に賀ばしい次第であると考へます。私は今日この統一閣の降誕會に出席をする機會を得ましたが、この講演を終りますと直ちに出發を致しまして、明日は大阪の天王寺公會堂に於ける釋尊降誕會に午後

一時より出席をして講演をする次第でありますが、大阪は東京よりもヨリ良く行つて居る。大阪市役所が非常に骨を折りまして、大阪市内の各宗寺院を打つて一團としまして、大々的の降誕會を修するのであります、七日、八日、九日の三日間に亘りまして大阪市内の學校を休ませまして、學校の兒童男女を悉く集めて釋尊降誕のこの聖日を祝することに相成つて居ります。その點に於て東京は大阪に後れて居ると申して宜しい、東京市長は中々わかつた人と稱せられて居りますが、併しその點に於ては大阪に後れて居ると私は考へます。どうかこの釋尊の降誕の日の如きは、到る處に全部の學校を休ませまして、小學校ばかりではありませぬ、大學校であらうが、海軍の學校であらうが、何學校であらうが、一切休まして、總ての商賣を休んで、朝から晩までせめて一日釋尊の大恩を想ひ起して、感謝の涙に咽ばなければならぬと私は考へます。

私は『釋尊の大恩』といふ講題に就て聊か所見を申上げやうと思ふのでありますが、釋尊の大恩は眞實に之を語ることは出來ないとお經の中にも說いてありまして、佛の御恩を眞實に領解するものは唯だ佛あるのみぢやと迦葉菩薩が申して居ります。吾等は唯だその大恩の中の一部分に就て、感激致しましたことを申上げて、御恩に答へるより外致し方がないのであります。

この釋尊の御降誕に依つて吾等が享ける利益はどの點にあるかと申せば、私は少なくとも二つの大きなものを與へられると考へます。人生は二つのものを取つてしまへば餘は墮落であります、その二つの大きなものとは何であるかといへば、一つは善き教を以て教化する事であります、善き教を人生より除りますれば人生は墮落あるのみである。モウ一つは善き人格を以て教化する事に於て人々が導かれるのであります吾等の歷史にある所の人格者、偉人といひ聖者といひ、哲人といひ、英雄といひ、吾等が崇拜すべき所の人格を持つ人を崇めまする事に依つて吾等はその墮落を免れる事が出來るのであります。所が今日御降誕になりましたお釋迦樣は、教を留め給うた事に於て世界第一の恩人であります、又人格を以て吾等を導き給うた事に於ても最高の恩人であります。戊申詔書には諸君の御承知の通りに

抑々我ガ神聖ナル祖宗ノ遺訓ト我ガ光輝アル國史ノ成跡トハ炳トシテ日星ノ如シ、寔ニ克ク恪守シ淬礪ノ誠ヲ輸サバ國運發展ノ本近ク斯ニ在リ。

と御示しになつて居ります、日本の國運を發展せしむるに就いては、いろ〳〵の方法がありませうけれども、一番大切な事は、祖宗の遺訓を明かにしてその祖宗の遺訓に感激することが一つ、それから國史の成跡に顧みて吾等の崇拜すべき人格者の感化を受けることが一つ、この二つを本當にやれば國運發展の本は斯に在るとお示しになつて居るのであります。それは實に有難いことでありますが、この意味合を以て考へますれば、遺訓といふことは即ち教であります、國史の成跡といふのは人格の感化であります。この善き教を留め給ふことゝ善き人格を以て感化をお與へ下される二つを想ひ起しまする時に、吾等が奉戴して居る大聖釋迦牟尼佛は、一代五十年の長きに至つて一切經を留め置き下された、最も完全なる教を與へられて居る教の恩人であります、その人格をいへば智慧に於ても、慈悲に於ても、活動

に於ても、圓滿にして實に缺くる所の無い、人格というてもモウ人間ではない、佛樣としての人格を發揮せられた尊い方であります。世界に偉人聖者多しと雖も、吾等の信念より見ては大聖釋迦牟尼佛は實に傑出して居る所の、所謂普通の人間でなくして佛樣が御降誕なされた、吾々より見れば超人的の聖者で在らせることを信ずるのであります。

左樣な尊い教と尊い人格とに依つて享けましたる人類の影響はどれ程なものであつたでありませうか、釋尊降誕の時より年を隔つること大凡三千年、東洋に傳はつたる說に依りますれば二千八百七十二年に相成るのでありまして、神武天皇に先立つこと數百年であります。地を隔つること數萬里、印度と日本は海を隔て山を隔てゝ居ります。けれども不思議な因緣を以て早く日本の國にこの佛陀の敎が參りました、その敎を通して佛陀の人格も我が國人に紹介せられたのであります。早くより聖德太子の如き傑出したる方がお出ましになつて、いきなり佛敎を咀嚼してこの日本の文化の內にこれをお容れになりました、日本人としては釋尊の人格を窺ふに就て困難を感ずる點は少しも無い、釋尊の御敎に近寄らんとするに於て何の妨碍も無い、何人も皆篤く三寶を敬ひ、佛陀の敎に近づいて佛陀の人格に觸るゝ機會を與へられた次第であります。それがこの日本の文明にどういふ影響を與へたか、吾等の祖先がこの敎を信ずることに依つて罪を免かれ、苦しみを遁れ、現在の生活に於て多大なる幸福を享け、死後皆これに依つて救はれたといふ事を考へますれば、實に釋尊は諸君の祖先に對して、又諸君自らに對して、又復諸君の子孫に對して、直接の大恩を與へて下さる所のお方であります。それは偉い人も世界に澤山あります、西洋のアリストートルとか、ソクラテスとかカントとかいふやうな學者もありますけれども、それは西洋の人が少しばかり學んだきりで、吾等の祖先、及び現在の國民は、その影響を受くる事極めて少いものであります、大聖釋迦牟尼世尊は、地を隔つる事數萬里なれども、如何なる因緣であるか、吾等の先祖は皆この佛陀の敎に近づき、それに依つて人格を導かれ、それに依つて罪を遁れ、それに依つて苦しみを免かれて來たのであります、御恩といつても牡丹餅を貰つたとか、壽司を御馳走になつたとかいふやうな小さな事ではないのであります。

そこでこの偉大なる御恩の事をどう考へたら宜いかと思ひますが、私の唯今の考に於きましては、二つの事を申上げれば御恩の深い意味がよく領解されると思ふのであります。吾々はこの人生に生れは生れましたけれども、大切な事が分りませぬ、それは何であるか、自分の命であります、自分の心であります、本當の自分であります、本當の自分といふものが分りませぬ。「お花さん」と呼べば「ハイ」といつて顏は出しますけれども、顏がお花さんではない、本當のお花さんは何處に居るか、「ハイ此處に居ります」と言つて顏を突き出すだけで、本當のお花さんは何處に居るかなか〳〵分りませぬ、「孫兵衞や」といへば「ハイ」と返事はするけれども、孫兵衞といふ者の本體は分りませぬ、顏を以てこれが孫兵衞ぢやと思つて居るけれども、その者の本體本質といふものは分りませぬ、それは本人自身も分りませぬ、唯だ呼ばれたから返事をするといふ位のことであります。寢て居る時分は無論分りませぬ、惚けて居る

時分も分りませぬ、飯を食つて居る時分も分りませぬ、道を歩いて居る時も分りませぬ、多くの場合に於て殆ど人間は自分自身を忘れて生活をして居ります、甚しき者は生れて死ぬまで、眞に自分といふ自覺を持たずして、唯だ花に浮かれ、酒に酔ぱらつて、この人生を酔うた儘で過して行くのであります。

所がこの一番大事な命といひ、魂といひ、本當の自分を明かにして、その尊いことを教へて、本當の自分に目醒めさして下さる方があつたならば、これが一番大切な恩人であると考へます。この意味に於て宗教が尊いと稱せられて居るのでありますが、釋迦牟尼世尊はその宗教をお開きになりまして、如何なる者に對しても、唯今申した命の事、魂の事、心の事、眞の自己――假の我ではなくして眞の我、小さい我ではなくして大きな我、滅ぶる我ではなくして滅びざる我、その本當の自己を教へ給ふこと、實に至れり盡せりである。世界に學問あり宗教ありと言つても、大抵はこの大きな問題に就ては宜い加減な事を言つて居る、これを『論語』に見、これを『孟子』に見、これを他の多くの書物に見た所が、基督教の『聖書』に依つて見た所が、吾等の魂は神から與へられたとか、蛇にだまされたとかいふ位の話で、本當の自己を教へて居るものとは、斷じて言ふことは出來ない。孔子も之を教へることが出來ず、基督も教へることが出來ぬ、その他の學者も捏ね廻した者は澤山あるけれども、本當に吾等の安心立命として、成程左樣なものでありますかと、自分自身が玲瓏珠の如き我であるといふ安心を與へた者は、唯だ一人大聖釋迦牟尼世尊あるのみである。大恩と言つても他にこれ程の御恩は無いのであります。

西洋の或る宗教改革者が言ひました通りに、魂を本にして考へたならば、天地宇宙に魂より大切なものは無い、普通人の考へて居る命といふ、唯だ三十年か五十年に限られて滅び去つて行くものならばそれの價値は大したものではないかも知れない、それでも一日延して貰へれば百圓出さう、二百圓出さうといふ相場になつて來ませう、金持ならばもつと段々競り上げて來ませう、例へば安田の親爺さんならば、「お前モウ一年命を延してやるから幾ら出すか」といふ事になつたら、「五百萬圓出さう」「それはちつと安い」、「それでは六百萬圓出さう」……といふことになるかも知れぬ、僅かに滅び行く人生のその日〳〵の生命でも中々高價なものでありますが、それは滅びない永遠の生命といふものに考へた時に於ては、これは迚も錢金などを以て算盤に算へらるべきものでないのであります。諸君が心を落ち着けてよく考へて御覽なさい、自分自身の魂が無い、心が無い、己れが無いといふことになつたならば、他のものはいくら存在して居つて見た所が何にもならぬことになつてしまふのであります。此處に非常な美人があつて、「それが女房ぢや」といつて見た所が、自分が空ッポであるといふ事ならば女房でも何でもない、非常に立派な家があるからといつても、己れがなければ自分の家ではない、國があつて見た所が世界があつて見た所が、日月があつて見た所が櫻の花が咲いて見た所が、己れその者が滅亡であつたならば、餘は空虛なものであります。それ故に西洋の宗教改革者が絶叫を致しました、吾等宗教の立場から考へて見たならば、この天地間にある所の物質上の總ての物を以て、ダイヤモンドであらうが黄

金であらうが、あらゆる尊い物を以て、さうして一方この人間の魂、最も價値の無いやうに見える橋の下に寝て死にかけて居る乞食の、極く下賤なる者の魂一つと、この山の如く積んだる所の黄金財寶と取換へるかと云つたならば、決して取換へることは出來ない、命が無ければ黄金などは石瓦と何の違ひもないのである。人は命あつて而して後に牡丹餅がうまいとか、或は瓦は食へないといふ事になるけれども、己れの生命が無ければ牡丹餅も馬の糞も何の違ひもないのである、生命あつて而して後始めてそこに物の價値が生じて來るといふことを叫びましたが、如何にもこれは大なる眞理であります。

その尊い所の己れ自身を取扱ふ上に、やり損ひを致しましたならば、それは時計を落したとか紙入を落したとか、或は家が燒けてしまつたとか、金庫を盗まれたとかいふやうな、そんな小さな問題ではない、己れ自身の魂が溝の中に落込み、或は地獄の釜の中に落込み、或は餓鬼の中に落込んで、赤鬼に捕まつてどづかれるといふことになりますれば、こんな大損害は無いのであります、何が口惜しいといつても、自分の生命、魂そのものが泥の中に打込められ、或は灰の中に打込められるといふ事になつた時ほど失望はないと私は考へます。釋迦牟尼世尊は之を徹底的に教へました、汝自身に歸れ、汝の魂に歸れ、さうしてその魂を粗末な方法に依つて扱うてはならぬといふことを教へました、親と雖もこれ程に親切に吾々を思うて呉れる者はありませぬ、親の親切も限りがあります、「それは今までは世話をして來たけれども、こつちは段々年を老る、お前の方は達者でピン〳〵して居る若い者だから、さう〳〵お前の事ばかり考へて居る譯に行かない」といふやうになる、けれども釋迦様は最後の最後まで、何處々々までもこの吾等の生命の行末を見屆けなければ止まぬといふ誓ひを立てられて居る。その意氣の徹底は實に驚くべきものであります。茲に於て私は第一にこの生命を明にし、これを尊び、その行末を導いて呉れるといふ宗教の第一の本領に於て、大恩教主の御恩を想ひ起さなければならぬと考へます。

自分の先祖と申しても今になつては魂であります、先祖の肉體は滅びて土と成り灰と成つて居る、先祖を敬ふとか先祖を大切にするといつても、今はその魂を扱ふより外はない、この魂を導いて、先祖をして幸福にして呉れる者は、大臣でもなければ警視總監でもなければ憲兵でもない、唯だ大恩教主釋迦牟尼佛あるのみである。故に諸君が眞に祖先を思ふといふ事になつた時、どうしても佛の大恩に感激せざるを得ないであらう。「先祖は思うて居るが佛様の御恩は感じられぬ」……といふやうな事になつたならば、子供が病氣に罹つた可哀さうだと思ふけれども、醫者ナンか探ねないといふと同じ事であつて、眞に子供を愛するならば善き醫者を求め、その醫者が病氣を治して呉れたならば、子供が可愛いと思ふと同時に、あのお醫者様は有難いといふ事にならなければならぬ、眞に諸君が先祖を思ふならば、その先祖を救うて下さる方は即ち大恩教主釋迦牟尼世尊である、誠にその御恩は大なるものなりと感ずるであらう。お寺に行つて坊主にお布施を包んでカン〳〵鐘を鳴らしてお經を讀んで貰つて、それで法事は清んだ、先祖は助かると思つて居るか知らんけれども、それは取次人に過ぎない、本當に助け

る本人は、日本全國幾萬の寺々に於ても、唯だ一人釋迦牟尼佛である、餘は附たりぢや、その御恩の中に於て吾々は飯を食つて居る所の居候である、本當の救ひの力の出て來る所はお釋迦樣である。これを考へても、實に大恩教主と申さなければならぬ譯である。

第二に釋尊の御恩を考へた時斯ういふ事が言はれると思ふ、それは吾々は肉體を持つて居るが爲に、肉體の要求から來る所の慾望を斷ち切る事は出來ない、どうしても胃囊の要求として食物が必要であり、又男女の關係の慾望があり、さうして又たゞ譯も無く生きて居りたいといふやうな要求がある、何故と尋ねられては答辯が出來ぬけれども、唯だ死にともない、「どういふ譯だ」「どういふ譯といふことはないけれども、唯だ生きて居たい」といふ、段々年を老つて顏には皺が寄つて來、腰は屈んで來、齒は拔けて來、眼は凹んで來、頭髮は禿げて來て、知らない人から見たら穢ない爺だといふやうになつても、まだ〳〵その肉體を保存せんとする、モウ早や中風やみのやうになつて、一人で動くことも出來なくなつて居つてもまだ〳〵生きんとして居る、「お前さん何時まで生きる氣だ」「何時までといつて定まつては居ないが……」「それぢやア十年か」「イヤ十年ばかりではきかない」といふやうな譯である、或るお爺さんに向つて「あなたは百までお生きになればまだ十五年あります」と言つた所が「たつた十五年か、俺は百て死んでは堪らぬ」と言つたといふ話があるが、八十五の爺になつてもまださういふ考である、百まで生きれば十五年と言つたのは大分御機嫌を取つた積りでも、本人の方では「たつた十五年か」といふやうな譯で、唯だ生きて居りたいといふ。そこでそれが爲には人間といふ者は謂はゞ愚に歸る者である、偉らさうに言うてもだらしのないものである、終ひには洟を垂しても分らなくなる、初めは髮をひねつて居るが、終ひには水洟ぢや、そこを一つ徹底して人間といふ者を考へて行つたならばどんなものであるか、唯だ若い間は左樣な肉體の慾望の爲に追はれてしまひ、年を老つては水洟を垂して愚痴をこぼして譯の分らぬ事で一生を終るとすれば、この人生といふものは大したものではないぢやないか。所が中〳〵之を矯め直すといふことが出來ない、誰の力に依つてもこの肉體から來る所の慾望を制御し、之を統率し、之を淨化して程好くするといふことが中々出來ない、年と共に段々慾の皮は突つ張り、劣等な慾望は旺盛になる、頭髮は禿げるけれども猿々猿の如くになるといふやうな譯で實に甚しいものである、之を幾分でも淨め、幾分でも善くして戴くといふ力は、實は僅かな格言や僅かな昔物語ではいかぬ、餘程强大なる所の力を有つて、その前に立てば如何に痺れた者でも感激しなければならぬ、如何に腐れて行く者でも淨められるといふやうな、强烈なる所の感化力を持つたものでなければならぬ。

この意味に於て諸君は靜かに考へて御覽なさい、我國にも古來學者も出、人物も出、澤山の英雄も出ましたけれども、吾等の肉體の慾望を矯正して、幾分でも之を淨める力としては、誰を唯だ一人として數へますか、どうしても大聖釋迦牟尼佛に依つて吾等の祖先も、吾等も又吾等の子孫も共に淨められるものであるといふことは、間違ひの無い事實であります。その影響は大したものであります、己れが淨

くなるばかりでなく、淨い者と淨い者とに依つて家庭が作られ、淨き者を以て社會を作り、淨き者を以て國家を作る、そこに始めて尊い所の目的が現はれて來るのであります、この人間が淨められぬ限りに於ては、如何に法律制度を改正しようが、經濟の發展を圖らうが、如何なる社會組織を作らうが、腐れ果てたる人格の者を以て作る社會に、どうして理想が實現されますか、想へばこの吾等が持つて居る淺ましき肉體の慾望を制御し、これを善導し給ふ强大なる力をお與へ下された事に於て、釋尊の大恩に感激しなければならぬと私は思ひます。

（大綱）

社告

時は來ました、日蓮主義勃興の時は來ました、そして日蓮主義によりて思想問題、社會問題、人生問題、婦人問題等は解決されねばならなくなりました。此時社會國家の諸般の施設は、日蓮主義に覺醒めた婦人の努力奮鬪に待つべきものが多々ある事と信じます、こゝに本誌は日蓮主義婦人團體の全國的統一と、その振興改善を企てたいと存じます、奮つて御賛成を希望します、そして左記の通信を御願ひします。

一、御關係の日蓮主義婦人團體の、會則、事業、成立後の略史、會員數、其他參考すべき條項

一、日蓮主義婦人團體の統一及改善振興に關する意見（御通信中讀者諸君に參考となるべきものは本誌上に發表致します）

以上名古屋市中區新榮町常德寺内統一編輯局宛御通信を乞ふ。

實學（上）

山根日東

論語讀の論語知らずと云ふ古諺がある、それは言行の不一致を嘲つた皮肉の批評である、悲しい事には現代人は此批評に適中する者が多い樣に思ふ、願ふ所はその反對に論語讀まずの活論語即ち不言實行の眞人間が多くありたい。學校を卒業した丈では人間にはなれない、一定の學科を修得して多くの事を知つた計りが學者ではない、活きた學問を會得した活きた人間とならねばならぬ、活きた人間を造らねばならぬ。

汚穢い事を言ふ樣だが、小便壺の小便は毎日あとから〳〵と小便をする、從つて常に刺戟を受けて活きて居る。此小便を直ぐと野菜にかけると、活きた小便の爲めに野菜は枯死する、農夫は此呼吸を呑込んで居るから直ぐにはかけない、野壺へ移して若干の日子を經過し全く刺戟なき死せるものとして始めて利用する。井戸の水でも樂々と器械喞筒で汲みあげたのでは水は死んで居る、桔槔でピタン〳〵と刺戟を與へれば水は常に活きて居る。一荷擔ぎの魚行商が急き足で勢ひよく呼賣をやつて居る間は、黑鯛でも鱸子でも、刺戟があるから盤臺の中で苦しみながら活きて居るが、魚屋が少し休息する間に忽ち腹をかへしてお陀佛となる。

活きた學問は學校てはどうも駄目のやうだ、大學卒業生も出たてのホヤ〳〵と來たら殆んどポンクラが多い、父兄の脛を喫つて太平樂に科程を畢へたと云ふ迄て、社會の苦い辛い刺戟を受けないからてあらう。之に反して學歴はなくとも天地は一大學校てあるから、氣をつけて常に刺戟を甘受して居る側の人は在外無學の學者がある。一歩門外に出て見ると道路に凸凹がある、道路は元來平坦に造り上げた筈のものを、何故斯うも不平均に凸凹が出來たかと云ふに、それは地盤の柔かい所は窪む水がたまる低くなる、堅い部分は其儘だから月日の經つ間に自然にこんな不始末のものと成たのてある。人間もその通り、柔かい方の側は窪む低くなる輕蔑される何日とはなしに落伍者と成て仕舞ふ。堅實なる思慮ある人間はその憂ひなく、常に幸福の歩みを續け得らるゝ。てすから常恆不斷に自己反省を繼續して、信仰に活き堅實の生活を遂げる樣心掛けねばならぬ。實學即ち活きた學問は六ヶ敷ものては決して無い、心掛一つて屹度及第點は取れるものと存ずる。

熊澤蕃山、大鹽後素、西郷南洲等の傑士は肯しくみな陽明學によりて其人格を鍛え上げた方々てあるが、其學祖王陽明の私淑した先生に周茂叔と云ふ人がある、此茂叔先生根本問題を握つて居たが、さて些事には一向お構もない人て、庭園の雜草は蔓り放題少しも手入をしない、或出入の商人一日先生を訪問して此爲體に驚き、先生お弟子達に御命令なさつてちと庭園の掃除を遊ばしてはと注意した、處が先生の答が面白い『未だ心内の草を拂ひ盡さず、寧んぞ窓前の草を拂ふに遑あらんや』と來た、自分の心の内には日々妄想邪念の草が苅れども〳〵發生して仕方がない、庭園の草なぞ頓着して居る暇があるかいとてある、商人ギャフンと參つて言ひ出し屁の何とやら、挨拶もソコ〳〵に逃げ歸つたとある。开處だ御相談したいのは其點だ。

自己心内の雜草を刈り盡し俯仰天地に愧ぢざる人格を築き上げるのが實學の急所ぢや、現代の教育は寧ろ雜草繁茂の肥料を供給して居るのてはなからうか、兎角は大事の問題を其方除けにして、些末の小事に濟むの濟まないのと角突合の喧嘩の花が雪の中にも咲き盛る世の中だ、氣をおちつけて考へて見たら慚愧に堪へない事計り多くはあるまいか。茂叔先生の『未だ心内の草を拂ひ盡さず……』此心掛けから出發した學問修業なら大丈夫、讀む書籍は皆こと〳〵く血となり肉となり潑溂として活きた甲斐性骨を鍛え上げて、逝れ國の爲め君の爲め、一切人類の幸福を齎らし來る、登たゞ蕃山南洲のみならんやだ、此畑からは活き〳〵した有爲の人材を輩出することを受合だ。陽明先生が『六經我を註す』と云ふ事を云はれたが、それは經書はたゞ積んて置くものてはない、又讀んだのみては何にもならぬ、自分の血となり骨となり自分の行爲思索と一如して、自分を註釋したものが經書だ、經書の活きて働いてるのが自分だと、此域迄進まなくては駄目だとの事てある、此意氣抱負信念てなければ眞の學者、眞の人間は出來ないのてある。要之普通一般の教育ては博識は得られやうが眞乎の人間は容易に得られない、一つ思ひ揣ふて實學興隆の大計畫を根本から築き上げたいものてある。

日蓮聖人の門子法孫を訓育せられた芳躅を討ねて見ると、實學も實學眞乎洗錬されたる大實學てある、皮膚毛細の末技は措て問はず、專ら骨の仕上げを重ぜられた所謂剛教育の大方針の下に二千數百頁の御遺文は現存してるのてある。『智者學匠の身となりても地獄に墮ちては何の詮かあらん』骨身に徹る金玉の名句今猶ほ凛として聲あるてはないか。

日蓮主義より見たる無量義經

第一回

井村日咸

大正三年中「開結二經の研究」と題して四回に亘り無量義經に關する研究の一部を本誌に掲載したるも、今回日蓮主義青年會に於て本經を講演するに際し會員よりの希望に依り再茲に掲載するに至りしものなり、仍て前記「開結二經の研究」とは重複する點あらんも之を諒せよ矣、

無量義經は法華經の序分として法華經と直接深き關係を有する大切な御經文である、然し古來餘り深き意味に於て本經を取扱つて居ない、但四十餘年未顯眞實の文を權實二教の境界を明示した文として珍重せられた以外に、重大な意義を有して居ることを認めないのは甚だ遺憾に思ふ次第である、此は此經が一卷四十餘紙の小部であるのと、注釋書等も少ない關係杯よりあまり深く研究せられない結果であろうと思ふ、然し私が研究致した處に依ると、此經は小部な經文の割合に其内容が非常に整ふて居る、其説述の順序と申し、其意義の廣遠なる點に於て、又簡にして要を得たる事は、他に類を見ざる點である、法華經は八卷廿八品にして其文が廣汎であり、且つ三周の説法抔言ふて同じ事を三度も繰返して居る樣な次第で、其要領を得るに苦しむ譯でありますが、此經は其樣な事は無い、但法華經に於ての中心教義たる迹門の教法統一の理想と、本門の本佛顯本の大事とは此經には無い、故に此經に顯はれたる教義に、本迹二門の中心教義を附加して見ると、其處で始めて完全なる教義が顯はれて來るのである、今回青年會の爲に本經を講述する趣旨も、諸君をして日蓮主義の要領を得せしむるに捷徑なりと信じて本經を講ずる所以である、仍て本經を講じながら、法華經の重要教義を取纒めてお噺致して、日蓮主義の要領を會得して戴かうと思ふのである。

本經と法華經の關係

本經は法華三部の中の一部で、法華經を正宗分とし、無量義經を開經とし序文とし、觀普賢經を結經とし流通分とする、此三部の中に法華經は如來出世の本懷、隨自己證の極説で、此經已文の隨他意の諸經とは大に其趣旨を異にする次第であるから、先づ今日迄の隨他の諸經と、隨自の法華經との關係を一應説明して置く必要がある、そうでなければ、如來の説教が前後矛盾して衆生を迷惑さすることになる、それは、此無量義經に如來出世以來四十餘年の説教は、衆生の根性萬差なるが爲に餘儀なくせられて説いたのであつて、自分の本來の希望ではない、衆生があ

より分らな過ぐるに依つて、其程度を引下げて淺劣な教として說いたものてある、今や四十餘年の教調によりて衆生の根性大に開けたれば、將に如來已證の眞實を示さんと欲して、先づ『無量義は一法より生ず』と說いて、四十餘年所說の無量義は一法の根源ありと說き、其一法を無量義として敷演せざるを得ざる理由を擧げて、『性欲不同なるが故に』と說かれた、此は法華經に於て、無量義を一法に統一せんが爲に、其前提として、開出した一面を說かれたのてある、正宗分たる法華經の教法統一の理想を說かんが爲に、其準備として豫め無量義には一法の根源ありと示し置かれたのてある、故に此經は法華經の爲に其先驅を爲して居るものてあるから、法華經の序分とし開經と言はるゝ所以てある、如來は此無量義經を說き終つて、直に無量義處三昧に入り給ふた、其入定中に此土他土の六瑞があり、文殊彌勒の問答があつて、法華經の序品となつて居るのてある、然る處が古來、此經の四十餘年未顯眞實の文が佛教各宗の依經の方便權教たるを明示して居るが爲に、大分お困りの樣て、何とかして此未顯眞實の仲間から逃げ樣と焦慮して居らるゝ、殊に念佛門の方は一層苦勞して居らるる樣てある、色々考へた末に出來た辨解は淨土の三部經は無量義經と法華經との中間に說いたのだから四十餘年未顯眞實の中には這入らぬと云ふことてあるが、然しお經文に就て見ると、如來が無量義處三昧に入り給ふて、法華經方便品の初に、其時に世尊三昧より安祥として起つて舍利弗に告げ給ふまての間には、說法し給ふたと云ふことは認められぬ、入定中に說法したとの辨明はあまりに苦しい、入定中に說法することは不可能てあらうと思ふ、そんな餘計な辨明は却つて其眞實ならざるを證明する結果にはなりはせぬか、此は餘談てあるが現今相當の學者と稱せらるゝお方がそんな脆辨を弄せらるゝから一寸お斷致した事てある、此經に於て如來が四十餘年の諸經を未顯眞實なりと宣明せられたに就いて、一會の大衆が感想を日蓮聖人は、開目鈔に

佛御歲七十二の年摩竭提國靈鷲山と申す山にして無量義經をとかせ給ひしに、四十餘年の經々をあげて枝葉をば其中におさめて、四十餘年未顯眞實と打消し給ふは此なり、此時こそ諸大菩薩諸天人等はあはてゝ實義を請ぜんとは申せしが、無量義經にて實義とをぼしき事一言ありしかどもいまだまことなし、譬へば月の出んとして其體東山にかくれて、光西山に及べども諸人月體を見ざるが如し。

（縮遺七八二）

と仰せられた、月體は法華經の開三顯一開迹顯本の二大教義てある、其豫光として今經の從一出多の教義を說かれたのてある、即ち序分としての役目を爲すものてある。

序にお斷を致して置きたいのは、佛教研究に就て、最も大切なのは教法と教法の中に說かれた理法との關係てある、教法を根基として、其教の中に顯はれた理法を見るのと、理法を基準として教法を見て行くのとの間に大變な異目を生じて來ることてある、日蓮聖人開目鈔に曰く、

黑白の如くあきらかに、須彌芥子の如くなる勝劣尙まどへり、いはんや虛空の如くなる理に迷はざるべしや、教の淺深を知らざれば理の淺深を辨ふものなし。

（縮遺八〇二）

と、此御文は佛教研究上に必要なる『能詮の教を以

て所詮の理を判ず』と云ふ判教上の網格を示されたのである。眞理と云ふものは宇宙に遍滿して居るものであつて、眞理其ものには大小權實の差別は無い譯のものである、然るに其眞理に大小權實の區別が出來るのは、其眞理を說き顯はす教の方に差別があるから、顯はさるゝ眞理の方に區別が出來るのである、御遺文中に例證せられた虛空に就いて言ふならば、虛空其物には晝夜の差別は無い、明暗の差別は其虛空を照らす日と月との光の差別に依つて異なる、教の日月の光に依つて、虛空の理の明暗が分るし、眞理を基準として教を判斷すると大小權實の區別は明瞭である、今日の佛教が混亂して居るのは全く佛教教判の基準に誤があるからである。今一つ分り易い例を擧げて見やう、日本の天文臺には完全な器械が無い爲め、天體の觀測が充分に出來ないと云ふ、天體其ものは西洋で見る天體も日本で觀測する天體も一のものであるが、之を觀測する器械に完全なのと不完全なのとがあるから、其器械を通して見たる天體には差別が出來る、西洋で見へた彗星が日本で見へなかつたと云ふことになる、天體は眞理である、觀測の器械は教法である、教法の大少權實に依つて眞理の見方が違つて來る、佛教各宗の學者達が、教法の大小權實の區別を嫌ふて、眞理は一つであると云ふ方面から、佛教を見やうとするが爲に、佛教其のものが分らない結果に立至つたのである、不完全な器械で眺いた處を直に完全な天體として押通さうとするから、一方完全な器械のある方から、其は違ふと云ふ抗議が出て來るのである、故に佛教を研究するものは、此判教の網格を誤らぬ樣にすることが大切である、其必要からして、今經に四十餘年未顯眞實の文を說て、權實の區別を判然と定められたのである、故に法華經が如來出世の本懷の御經であると云ふことを、一曾明瞭にし徹底的ならしめんが爲に此經は重大なる任務を有するのである。

記事

各地の思想戰

四月京都活動史　一日於本山國禱會修了後講演「心學及衆生」萩原本山部長　同日夜健兒會例會立命大學二木陽道君の童話ありたり。△二日於本山方丈護正會例會「涅槃經纏講」萩原本山部長△六日健兒會例會二木陽道君の童話△七、八兩日は健兒會女子部出動花祭の花賣りに奮闘釋尊御降誕記念日なる眞意義を京都全市の人々に多大の刺戟を與ふ△九日は市公會堂に集合京都全兒童七千餘百名と共に盛大なる降誕祝賀を催す△十一日より例年の通り大法會嚴修す、午前七時山本通舞師の說教例に依り同師の慈說人を魅するの感深かりき十時より國禱會法要嚴修後一時の法要終りて正三時より註川日堂師の說教同師の熱辯には何れも傾聽す七時よりは、「開會の辭」萩原本山部長「宗教問題の正路」萩葉日慶師「宗教心に就て」武田文學士「法華經と實生活」本多管長猊下△十二日（晴）前七時原田日勇師の說教午後三時より如說修行の題にて本多猊下の御親教經快且つ的中せる御教訓多々何れも時の過ぐるを知らず、午後七時より於講堂日蓮主義大講演會開催「人界より佛界へ」松本堅晴師「人の心」國友日斌師「顯本法華の妙旨」本多管長猊下聽集昨年の比に非ず實に四百名以上京都に於て宗教講演にして聽集者の多きは本宗の右に出るものなし△十三日（小雨）前七時より淺田純榮師の說教午後三時より本山部長の挨拶本年は特に登山參各師を待遇する都合上夜の講演中止。三日間の大法會は近年に無き多數の參詣者を迎へたり、午前の差定は三寶禮、受持文、勤請、方便品、壽量品、散華鈴、對揚、（國禱會、祠堂施主）自讚（燒香）、題目、三歸退座。午後差定、入堂樂、三寶禮、受持文、勤請、方便品、壽量品、散華鈴、行道、中樂、對揚、自我偈、題目、同向、受持、三歸、退座、引樂。△十六日夜健兒會例會「桶狹間の戰」林玉光先生「茶目の旅行談」山田篤三郎主事「古と今の殿樣」今井乾章師△廿一日健兒會例會中村恒夫、二木陽道君の童話。△廿六日夜健兒會例會「創の話」小林啓善君「白木屋の三寶」久世寛照師△廿八日立教同宗記念日、蕨草塚登山、洗一園、護正會、國光婦人會連盟にて長の記念日を祝賀せん爲め各自數日前より準備に忙殺せられつゝ京都各新聞は申す迄も無く數百の案內狀に同志を募る午前二時起床御題目に妙滿寺布教部と染抜きたる赤と紫の長流旗を押し建て曉の星を戴いて萩原本山部長を始めとして有田、坪永、土持各師の猛者を先頭に出發蕨草塚山頂に六百七十年前の當時を追慕しつゝ山谷に轟く高唱につれて山を離るゝ旭光を拜す終りて記念の撮影をなし山を降る本年の登山中十數名の婦子軍が加はりたるも喜ばしき事なりき同日後二時立教同宗會並に開山會法要修行後本山部長萩原日道師の熱烈なる講演ありたり。

大阪教況　四月一日於水木佐吉宅「日蓮主義と人生觀」上田智量△三日蓮成寺列月講演會「眞の解脫」京藤義應「純正信仰と題目」上田智量△五日三五會講演會南窪吉宅「東洋思想の綱格」上田智量△六日世良忠人宅「法華經に於ける生死觀」上田智量△九日大阪市花祭り大阪市佛教團主催天王寺公會堂に於て「釋尊の御恩」本多大曾正猊下△

十七日大阪統一團主催大紙倶樂部に於て「日蓮主義綱要」本多大齋正税下△廿二日於内原宅「生死の一大事」京藤師△廿三日蓮成寺「衣垂室の三軌」京藤晩鹿「人はどふなるか」上田智量△廿四日三五會講演會參熊吉宅「國民生活と日蓮主義」京藤義應「本門の三秘」上田智量。△廿八日於堂屋寺「開會の辭」京藤師「我祖の立教開宗」三谷會書師「東洋思想の綱格」上田布教師。

耳原法華寺開宗會

同寺は老僧章名玄德師永年在職の地にして同師は老齢病症の身を以て一意專心布教に盡瘁せられ昨年同教會復興と共に時々上田師を聘し講演會を開催せられ四月廿八日午前宗旨建立會法要厳修午後川崎布教師及上田師を招聘し講演會を開催し上田師は教義尊重の意味を敷演せられ川崎師は日蓮聖人に對する感激の題下に一時半に渉る大師子吼は滿堂の聽衆をして歡喜法悦に溢れしめ五時閉會を告ぐ因に同寺は檀徒の信佛熱烈なるに加へて信徒中虎谷氏等の篤信の士ありて勞力せらるゝは宗門の幸慶實に餘樣より打出す梵鐘の響に應じ參詣者の一時に來集を見るは他に見ざる好模範なり。

神奈川縣教報

四月八日藤澤町釋尊降誕會に於て「世界唯一の人格」△十日稲荷佛教會館にて「日蓮大上人に歸命せよ」△十九日横濱修道會「活きんとする力」△二十三日横濱公道會「日蓮主義の要義」△二十八日飯田本興寺「立教開宗の大精神」△五月五日鶴見木工會社「自己を省みて」△六日高篠二郡の新人會「大日本主義と新人」の題下に三上義徹師の講演あり何等かの反響を與へしなるべし。

東京教報

四月八日夜本所日蓮主義道場にて兒童二百餘名の爲に「日蓮大上人の少年時代」△二十日開國鈴木商店「活ける信力」△二十七日月島起後屋「自己を信ぜよ」△三十日青山原宿門倉氏宅「中心を把住して」三上義徹師の講演あり。

千葉縣教報

四月十九日山武郡南郷村鈴木氏宅「信仰より生活へ」△五月一日大原町青年團「現代思潮と大日本主義」大網町公會堂「日蓮主義より觀たる現代思潮」と題し三上義徹師は數時間に亘る長廣舌を振ひ信力の靈火を點じたりと云ふ。△四日佐倉町鈴經寺入佛供養並紀念大講演會を開催す詳細は次號に。△第三教區布教團の活動、本布教團は今回文書傳道部を設けて雜誌『法光』を發刊して毎月茂原道路布教の際施本することゝせり△四月八日長柄村飯尾寺に例會を開き經書研究を爲し同月十九日茂原市場に於て秋葉本村長岡竹内、宇津木、山本の各師得意の辯もて日蓮主義を力説せられたり△五月八日長柄村山根滿蔵寺に例會同月十九日茂原傳道團員總出にて盛會なりき△四月八日夜常覺寺に於て題目講「日蓮聖人傳」中島元道師△十一日夜常覺寺に於て青年會例會「自覺」中島元道師△廿八日夜東金町鈴法講主催日蓮聖人御一代記幻燈會出演者、中島元道師、野口海印師、津村俊乘師、神田蓮冲師。

和氣通信

四月五日夜神根村竹内勇吉宅「精神勞働」原田日勇△四月六日和氣郡各町村幹部青年團講習會「青年の自覺」武居地方教育課長「至誠一貫」原田日勇△七日横井學務課長内田郡視學の講評「靈魂不滅」原田日勇△八日武居課長の「青年の自覺」「思想問題に就て」原田日勇△八日赤磐郡久成寺に於て區内巡廻布教の一部「開會の辭」吉塚通榮「四法成就」原田日勇△九日吉ケ原本經寺先住法要後三時より「本尊の確認」原田日勇△夜「開會辭」星貫「法華の行者」原田日勇△廿日婦人會「四法成就」原田日勇△廿一日同信會「行想」原田△廿三日夜津山弘通所にて「社會思想と法華經」原田日勇△廿七日夜同山本行寺篤信會「開會辭」町田事光「人世の眞價」原田日勇。

金澤教報

四月十五日午後七時於兼六公園内屋外講道「開會之辭」石橋會章師「一乘法」成島隆光師「日蓮主義とは何ぞや」本郷常次郎氏△十六日、同時、同所「宗教の要義」石橋會章師「我が國體と日蓮主義」本郷常次郎氏△二十日午後七時於吉川氏宅「釋尊傳」本郷常次郎氏△二十二日午後於本長寺「佐渡御書の一節」宮田純榮師「護法心に就て」本郷常次郎氏△同日午後七時於井村氏宅「釋尊傳」(續)本郷常次郎氏△二十六日午後七時於本長寺天晴會講演「法華經序品(二)」宮田純榮師「佛教と生活」小島由之助氏「念佛無間論(續)」石橋會章師△二十八日午後二時於卯辰山日蓮上人銅像前「開宗に就て」本郷常次郎氏

はちす婦人會

四月廿二日午後七時半大開通六丁目統一團神戸支部に於て、修法、法話、熊井本光師、餘興(落語)。△五月十五日午後七時半より於同所、修法、法話、熊井本光師。

津山教報

三月五日午後七時本蓮寺に於て知法護國道友倶樂部例會を開會會員諸氏の所感の後能仁一十師の講演△廿一日苫田郡新野村青年會春季總會を開催能仁一十氏は『國民思想の基調』と題して講演△同月同日午後一時本蓮寺に於て後彦法要を厳修し能仁一十師の法話、此の夜近く廣島市松川町妙詠寺に轉任さるゝ能仁一十氏の送別の宴を催し盛會裡に閉會せしは午後十二時過ぎ△廿四日本蓮寺に於て道友會例會開催能仁一十師は『發心の大事』と題して語らる◎本多日生税下來敎。第一義院日容上人三十三回忌法要並に大講演會開催の計畫ありし津山教壇は寺にして管長税下の來貫を待うすることを得たれば一同大に氣勢を擧げ能仁一十師を先頭に『辻説法』と大書せる大提灯を提げ・

報恩文一章

人生の事教化より重且大なるは無し而して教化に方りては不易の鉢道と順應の用道とを大觀するを要す是れ則ち佛教に四悉檀の施化を示す所以なり若し第一義の鉢にして明かならずんば他の三悉檀の用道は盲すに衛無きなり、我が恩師第一義院日容上人は其院號の示すが如く第一義の鉢道に精通し其の院號の示すが如く三悉檀の用道に於て從容を理想し四悉檀の活用は恩師が日夜に苦慮せられし所なり今茲に恩師の第三十三回諱を迎へ道墓の情景に新たなるものあり、恩師日容上人は長州の藩士にして出家は中年の得度なるも行學の練磨衆に秀て經學は本所臥龍巷の田口文厳先生に學び又森田損齋翁の講莚に列して其の精髓を極め佛學は小栗栖慧林に入り法統の正脈は之を永昌院日鑑師より繼承せり恩師日容上人は心を專ら法統擁護に注ぎ各宗各派の秘書を渉獵し信念頗る篤く大いに教化を重んじ内に子弟を訓育し外に信徒を教

を守りて赤貧に安んじ其の日常の行業は古の聖者に譲らず護法の志願は一代に冠絶したりき、恩師が我が顕本法華宗の正脈を鮮明にし眞道を發揮し學風を刷新し布教を發達せしめたるの功績は宗門僧侶の齊しく感激して措かざる所なり恩師が本山寂光寺を去つて岡山津山に弘通所を開き孜々として正義の教化を布き又網羅を提げて本宗大學林長の職に就き長途を經て上京せしが如き以て其の平生の志を見るべきなり。不肖日生は年十三にして恩師の會下に列し爾後十八歳に至るまで曾授六年の間日夜親しく童陶を受け進退清掃の小節より教學法統の大事に至るまで事細大となく指導啓發を蒙れり不肖にして若し宗門に貢獻する所ありとせば是れ皆恩師日容上人の賜なり不肖にして若し人文教化に補益する所ありとせば是れ皆恩師日容上人の賜なり本日並に津山信徒諸謀りて恩師第三十三回忌報恩の法會を厳修す不肖此の法莚に列なり今昔の感に堪へず偲ぎ願くば恩師日容上人の尊靈影響して我等門弟信徒の捧ぐる報恩の微衷を哀愍納受したまへ南無妙法蓮華經。

維時大正十一年三月三十日。

顕本法華宗管長總本山妙満寺貫主大僧正聖應院日生稽首。

名古屋自慶會月報

○四月九日、小松製絲六百名「修養の要旨」國友文學士、○十九日、豊田織機一千名「修養と德教」本多稅下、○二十日、小松製絲六百名「幸福と人格」本多稅下、○同日、豊田織下工場二百名「靜廻一代記」本多稅下、○二十一日、菊井紡織七百名「修養の心得」本多稅下、○二十二日、豊田本社一千二百名「善は行ひ易し」本多稅下、○同日、日本車輌八百名「修養と德教」本多稅下、○同日、愛知織物八百名「人は心掛け」本多稅下、○二十四日、專賣局千三百名「善は行ひ易し」本多稅下、○同日同所男工四百名「修養德教」本多稅下、○同日、三菱内燃機一千百名「幸福と人格」本多稅下。

廣告

活動寫眞

日蓮上人龍口法難

統一團名古屋支部の事業として新に日蓮主義通俗宣傳隊を組織し、最新式簡便精緻なる映寫機械（火災の危險なし、寺院の本堂にて使用する事を得、愛知縣保安課の證明あり）と、前記のフイルムを調べ、新に我門に歸したる斯界の元老飛雷天叫、改め飛雷院常警日覺法師をして信仰と熱練とを以て説明の任に當らしむ映寫希望の方は左記へ申込まれたし。

名古屋市中區新榮町統一團
名古屋支部
日蓮主義通俗宣傳隊

大僧正本多日生師講述

法華經要文講義

味が含まれて居る、それが所謂秘妙方便である。小學校の讀本などに書かれて居るやうなことは、皆この秘妙方便の意味合になつて居るやうに私は思ふ、「雀がチウ〳〵鳴いて來た、早く起きないと遲くなる」といふやうなことがあつたと思ふが、これなども、その事は洵に平凡なやうであるけれども、併しそれは何處まで行つても、どんな偉い者に成つても、早く起きないと遲くなるといふことは事實である、さういふことは何處に行つても害にならぬもので、子供が喜びながら聽くし、又その精神を考へればそれが非常な立派なことになつて居る、非常な大事な場合に方つてもその言葉はやはり有用な言葉になるのである。例へば今敵と對陣をして居る、敵が不意に襲撃をして來たといふやうな場合に於て、早く起きないと遲くなるといふ言葉は、その時に於ては國家の興廢存亡に關する言葉になつて居る、即ちそれは淺い場合に用ひても大きな場合に用ひても差支へないことである。丁度さういふ風に如來は方便を應用して、今の文部省に於て小學校の讀本を編纂して、平凡のやうであるけれども、後にそれが開發進歩して國民の大精神に一致するやうにといふことを考へたよりも、モッと偉い頭腦を如來は有つて居るので、即ち善巧の智慧を以て一切經を說いて居るものであるといふのが秘妙方便で、それが法華經の方便である。それ故に法華經は一代の方便の教を開顯して、方便を讃歎するのである、方便がいかぬといふのではない、この法華經に於ては所謂妙法蓮華經方便品第二であつて、所謂秘妙方便である。それには方便といふ事を餘程よく吟味しないといふと、方用方便のやうに教を輕んじて、機根に流れ行くとか、又名

を方便に借りて人を迷はし人を過たすといふやうな事でも、それも方便の爲にやつたのだといふやうに、之を濫用することは宜しくない。他の宗旨が甚だ亂雜にこの方便といふ事を用ひて、「釋迦だつて方便を用ひたぢやないか」といふやうなことを能く言ふ、自分の違り損ひのやうな事でも、「それは方便だから……」と言つて、無闇に方便といふ事に依つて自分の非を辯護せんとする者がある、それは非常に惡い事である、日蓮聖人はこの法華經の秘妙方便の意味を以て、濫用する所の方便の思想を攻擊されたものである。それ故に日蓮主義者は固陋偏狹であつてはならぬ、秘妙の意味から出る方便といふものは總て之を採用し、且つ應用して行かなければならぬ、唯だ日蓮主義は正義である、眞實である、最高の眞理であるといふのみになつて——その事は善いけれども——その應用の上に適當した方法が執られなくなるといふと、それは法華經の精神ではない、法華經は最高の眞實と完全なる方便とを併せ得て居る所のものである、それが法華經である、眞實だけが法華經だと言つて、完全な方便と切り離された教ちやと思ふと、そこが非常な誤解になる譯である。所がさういふ坊主も澤山居るので、出來損ひといふ者は兎角人間に多いものである、眞實を語れば唯だ眞實だけと思うて固陋な事ばかり言ふ、それはやはり一を知つて二を知らぬといふことになるのである。儒教の方に於ても君子は世と推移すとか、變通を知るとかいうて居りますが、習ひ損ひの儒者は頑固なものであるけれども、眞の聖賢は確かな所と、變通自在な所を併有して居つたものに違ひない。釋迦は達人であるから宇宙の大眞理を知つて居ること、それからそれを運用する上に於て巧妙自在なるものを有つて居つたのである、その兩方の最高の意味合を併せ得て居るものが法華經である、他の者は方便と言へば低級なる所謂方用方便のやうな末に流れてしまふし、眞實を語れば不徹底であるが故に、その教が足らぬといふことになる。法華經は眞實と方便と併せて完全に達したものぢやといふことを教へたのが、方便品が法華經の卷頭に現れて來る所以である。その位の事は日蓮主義を學ぶ者は餘程よく注意して考へて置かなければならぬ。それ故に完全なる方便の應用といふことは、寧ろ眞實を研究するよりモツと大事なことで、丁度醫へて見れば醫者が病理を研究するのと實際の病人の手を握つて投藥するのとの關係のやうなもので、「俺は病理の方に於ては決して間違はないけれども、病人の診察をしたり藥を盛つたりすることは時々間違ふかも知らぬ、そんな事ならぬ間違つた所が、俺は病理の方に於て間違はないのだから立派な醫者である」といふやうな醫者が出て來たならば、「それは危ない」といふことになる。宗教といふものは實際活きた人々に接觸する所の精神の醫者である、「俺は眞實の方だけは得て居るけれども、應用の方に於てはどういふ藥を盛るか知らぬ」といふやうなことであつたならば、精神の醫者として實に危いものである。今日佛教が振はないのはやはりさういふ風な事で、唯だ法華經を研究すると言へば古い書物として法華經を讀んで居つて、丁度漢法醫者が傷寒論でも讀んで居つて、脈の診り方も判らぬやうな醫者が出來て居るやうなものだから、同じやうな事を何時までもやつて居るので、引導を渡すと言へば古い紙に書いてある事を暗誦で覺えて居

つてうなるといふ事だけしかやらぬ、さうして教を説くなどと言つても少しも判るやうな事は言はぬ、これは洵に釋尊の思召に背いたやり方だらうと思ふ、釋尊の門弟子を教へたのは餘程そこが活き〳〵した意味で、眞實を突き留めてさうして應用に於ても少しも退をとらんやうに、一切衆生を殘らず濟度し終らうとする爲に、苦心をされたことであると思ふ。法華經を學ぶ者はこの佛の精神に徹底した考て行かなければならぬ、今の出來損つた者などは總て眼中に置かぬが宜い、左樣な事は一々批評する必要も無い。

それから方便品の内容には大事な事が五つばかりあるのであるが、その五つの事に就ての統一を説いて來るのである、唯だ一つ佛に就ての統一が明かになつて居らぬのが、方便品の未だ説き盡さゞる點であつた。その五箇の事柄とは一つは宇宙觀に就ての眞實である、この宇宙觀に就ての眞實を方便品の言葉では諸法實相と言つて、之を實相觀といふのである。それから二つは人身觀に就ての眞實で、これが方便品では開佛知見と説いて、所謂佛性論として現れて居る。それから第三は超人觀即ち佛の事であります、これが一通りは説いてある、「而起大悲心」と説いて、一切の者が洵に可哀想な有樣に居るといふことを見て、釋迦が大慈悲心を起したと言ひ、或は諸佛の「智慧は甚深無量なり」と説いて、智慧は説いてあるけれども、玆が所謂未顯眞實で、未だ眞實が顯れて居らない、これだけが方便品の大きな缺點である。これが缺點であるが故に今度驛つて眞の宇宙觀にも足らぬ所が出來、人身觀にも足らぬ所が出來る譯である、けれどもそれは壽量品の方から進んで見る意見であつて、一通りは宇宙觀に於ての眞實を説き、人身觀に於ての眞實を説き、超人觀に於ては未だ眞に徹底して居ない。それから第四には教法觀に就て開顯一乘の教を説いて、一切教の方便と眞實の關係を疏通し、方便の教必ずしも方便ではない、僅かの意味に依つて眞實と合體して來る。それで法華經は一切の方便の教を活かし且つ完全なる眞實の教を顯はした、それが一乘の教といふことである。それから第五には行法觀の上に於て、一切の人を皆菩薩行に立たしめて、小さな佛教の修行を否定して「坐禪がどうぢや」とか「念佛がどうぢや」とかいふやうなことは、佛教の修行の形式の極く小さい部分である、それは坐禪も何も惡い事はあるまいけれども、唯だ「坐禪して居るといふことが佛法だ」とか、「お經を讀むのが佛法だ」とかいふが如きことは、如何にも暗愚な話であります。尤もそれだから禪宗は禪宗といふのではない、佛心宗と言つて、「佛の心を傳へた宗旨ぢや」というて居るけれども、それもをかしな言ひ方である、佛の心をその儘吾〻の心の中に直〻傳へることも出來ない譯で、やはり教を尊んで行かなければ宗教は駄目である、宗教は所謂教化である。それであるからこの行法の上に於て、一切の人を皆菩薩行に立たしめる、その菩薩行は非常な圓滿な意味合ひであつて、總ての善を起して來る、信仰を本として一切の善根を活躍せしめて來る所のものである。殊に方便品には小善成佛といふことが説いてあつて、どんな小さい善い事でも皆大きな善根と一致するやうに、それを引き上げて來るのである、さういふ方便を開顯して眞實の教に一致せしむるが如くに、今申した「烏カア〳〵、

雀チウ〳〵」といふやうな事でも何處までも活きて來るやうに、どんな小さい道德行爲でも大きな理想から活かして來れば皆活きて來る。子供が煎餅の切れ端を「兄さん、お上んなさい」と言つて持つて來るやうなその氣分をも活かして來る。又動物が自分の仔を育てゝ居る、雀なら雀が米粒を拾つて小雀に食はして居る所までも、皆佛に成り得る所の種として開顯してあるものが法華經の精神である。先づこの五つの敎の眞實を語つたのであるが、佛身の所だけは不充分であつた、それは後の壽量品に讓つた次第であります。

一七、爾の時に世尊三昧より安祥として起つて舍利弗に告げたまはく、諸佛の智慧は甚深無量なり。其の智慧の門は難解難入なり、一切の聲聞辟支佛の知ること能はざる所なり。所以は何ん、佛曾て百千萬億無數の諸佛に親近して、盡して諸佛の無量の道法を行じ、勇猛精進して名稱普く聞えたまへり、其深未曾有の法を成就して宜きに隨つて說きたまふ所意趣解り難し。舍利弗吾れ成佛してより已來、種々の因緣、種々の譬諭を以て廣く言敎を演べ、無數の方便を以て衆生を引導して諸の苦を離れしむ、所以は何ん、如來は方便知見波羅密皆已に具足せり。舍利弗、如來の知見は廣大深遠なり、無量、無

礙、力、無所畏、禪定、解脫、三昧あつて深く無際に入り、一切の未曾有の法を成就せり。舍利弗、如來は能く種々に分別して巧に諸法を說き、言辭柔軟にして衆の心を悅可せしむ。舍利弗、要を取つて之を言はゞ、無量無邊未曾有の法を佛悉く成就したまへり。止みなん舍利弗、復說くべからず、所以は何ん、佛の成就したまへる所は第一希有難解の法なり、唯佛と佛と乃し能く諸法の實相を究盡したまへり、所謂諸法の如是相、如是性、如是體、如是力、如是作、如是因、如是緣、如是果、如是報、如是本末究竟等なり。

この方便品の始めの文は、先づ佛の智慧からして宇宙の實相を照した所を說いたのであります。佛の智慧を斥けて唯だ宇宙の眞理を眞理として見るならば、それは哲學である。又吾〻が直接その眞理に向ふことが出來るならば、宗敎といふものは要らぬのである、それ故に宗敎の說明式としては、その佛が覺つた智慧が偉大である、その智慧に照されたる宇宙の眞理は斯ういふものである、それを敎にして來るといふ順序であつて、どうしてもこの順序を立てなければならんのである。天台は之を「佛智に約して實相を論ず」と言つた、佛の智慧を餘所にして唯だ眞理を語らんとすれば、哲學的研究で宜いので、何も佛敎に依る必要はない、眞理とは如何といふことに就て、哲學風の研究で行けば宜いのだけれども、

それにしてもやはり前に發見したる人の思想を傳うて行かなければならぬ。總て人智は歴史的發達を離れて、自分が何等過去の文明に學ぶ所なくして、さうして靜思冥想したからと言つても、碌な考が湧いて來るものではない、唯だ一種の幻覺妄想が起るに過ぎない。釋迦にしても釋迦が覺る迄には、やはりその時代に傳はつて來た、或は哲學、或は宗教の學問を終つて、それからその上に更に自分の思想を磨いて、端座冥想して段々進んで行つたものである。これはもう文化史の上から考へたならば、人間が過去の文明に負ふ所無くして、全然飛び離れた思想が突然湧いて出るといふやうなことは、決してあるものでない。それは茸が生へるには茸の生へるだけの準備があつて、さうして松茸が生へるのである、この統一闘の前の道路の端には、幾ら松茸を生やさうとしても、どうしても生へつこはない、松茸が生へるには生へるだけの素地がなければならぬ。だからやはり宗教を見るには、宗教的偉人の智嚢を通じて現れたるものを見るのが一番宜い、それを成立宗教を否定して、自己の勝手に新たな宗教を採ると言つた時には、宗教が逆轉して低級なるものになつてしまふのである。獨逸などではさういふことをやつたものである、又今日の多くの學者は皆言うて居る、「何も過去の傳統的宗教に依ることはないぢやないか、俺が一つ考へて見てやらう」……それは考へて見ることは惡いことはないけれども、碌な考へは出來ないに極つて居る。今迄の基經にも依らず先生にも依らずして、「俺が一つ碁の打ち方を研究して見やう」といふやうなことを言つてやつた所が、それは初段に正目でも勝つことの出來ぬやうな笊碁しか出來はせぬ、やるのが惡いことはないけれども、碌な碁は打てない、洵に明白なことである。相撲取でもやはりその通りで、段々熟練した經驗のある者に稽古して貰つて始めて發達するのである、素人相撲くらゐで誰にも負けたことがない、「俺は非常に强い」ナンと思うて己惚ても、國技館に行つてやつて見たならば、ズッと低い所の褌かつぎと組合せられても直ぐ負けてしまふ。宗教に於てもその通りで、獨逸などがそんなことを言つてやり居つた、その個人々々に現れた宗教の中に進歩したものがあるナンと思うたけれども、實は碌なものはない。又日本に於てもさういふことを言つて居る人は二三あるけれども、皆内容は空ッポである、さういふ事を言ひ居る人は自分の信心さへも極つて居りはせん、唯だ總に「自分は過去の傳統の宗教に依らぬ」といふやうなことを言つて見たら面白からうとか、人から新らしいと言はれるだらうとかいふ位な煩惱の心の閃きが殘つて居るだけぢや、實に憐れなものである。

この方便品の始めの所は佛の智慧に約して實相を論ずるのであるから、先づ智慧を敷じてその中から實相が現れて來るやうに說かれて居る。「爾の時に世尊三昧より安詳として起つて舍利弗に告げたまはう」——「爾の時に」といふのは先きに序品に於て文殊と彌勒が問答をして、その問答の段落が終つて文殊が答へて、「將に法華經を說き給ふ前兆であらう」と申した、その言葉の終つた爾の時に、釋迦牟尼世尊が無量義處三昧から安祥として——「安祥」といふのは靜づ〳〵といふことで、洵に品位高く靜かに眼をお開きになつたのである。この「起つて」といふのは坐つて居つたのが立上つて話でもすることかと思

ふ人があるけれども、これは眼を醒すことである、即ち「眼を開いて」といふことである。だから法護三藏の譯した方の正法華經では、「安詳として覺めて」とある、その方なればその意味が能く判る譯である。これは形容詞であつて、やはり經家の言葉であるから、「今迄身心動じ給はなかつたのが活動を起して」といふ意味にも見える、始めから言へば眼を醒すのであるけれども、口も動くやうになり手も動くやうになる譯であるから、そこで安詳として活動を起されたといふ意味にすれば、この「起」といふ字でも宜い譯である。眼を閉つて居つたのが開いたといふ最初を採れば、正法華經の「覺」の字の方が宜いかも知らんが、羅什三藏は無論「覺」の字に譯したのを見て、而もそれに從はずしてこの「起」といふ字を用ひられたのであるから、やはり「起」の字の方が宜い譯であらう、それで廣く眼を醒し口を開き手を動かし教を說く、それから又時には立つこともあり坐ることもある譯であるから、「安詳として起つて」といふ方が「覺める」といふ字より宜からうといふやうになつた譯かと思ふけれども、それはどちらでも宜い譯である、唯この場合は坐つて居つたのが立つたといふ意味ではない。さうして「舍利弗に告げたまはく」――これは舍利弗を代表人物として、それに語つて言はれるのである。この事は說法の方式として極つて居るので、多くの聽衆があつても今の演說のやうに「諸君」といふやうな言葉は使はない、必ずその中の代表人物を捉へて演說をされる、唯だ「諸君」といふた時には誰が聽いて宜いか判らん、又受け答へをすることが出來ない。佛敎では必ず對手があつて「判つたか」と言はれゝば返事をしなければならぬことになつて居る、「諸君、以て如何となす」といふやうに言はれたのでは、何とも返事が出來ない、今の日本の演說などは「この事了解せしや」というても返事もしないやうなことになつて居るけれども、それは演說の退歩である、演說がもつと進歩して來たならば、やはり佛敎に說いてあるやうに「今日の演說は誰を對手にしたら宜からう」といふことで、對告衆といふものを極めて行くことにならなければならぬと思ふ。今この方便品では舍利弗が對告衆になつて居る、壽量品では彌勒が對告衆になつて居る、斯の如くそれ〴〵對告衆を定められて受け答へをすることになつて居る。それ故に舍利弗に告げて言はれたとあるけれども、聽いて居る者は大勢の者である。

「諸佛の智慧は其深無量なり」――總ての佛の覺といふものは絕對のもので、如何にも深いものであり且つ又廣いものである、さうして如何なる事にも徹底して覺り上げられて居るものであるから、それを其深無量と言つたのである。併しその佛の絕對の智慧といふものは、學んで容易に得難きものである、その佛の智慧と同じ所に達しやうとしても、中々それは解し難く入り難きものである、一切の聲聞辟支佛といふ佛敎を學ぶ人でも、小乘の敎に居りし者は迚も眞の佛の智慧を知ることは出來ない。何故かと言へば佛は長い間修行を積んで、功を積み德を重ねて得た偉大なる覺であるからである。佛は曾て多くの佛に近づいて、さうして殘らず諸佛のいろ〳〵の尊い道を修行して、その修行に方つても勇猛精進で少しも惰けるといふことなしに、熱烈に佛法修行をやつて、さうしてその中に名譽高く秀でたる所の

人であつたが故に、遂に成佛をされた譯である。さうして非常に深い「未曾有の法」――「未曾有の法」といふのは世に容易に無い所のものをいふのであつて、容易に無いといふのは佛法の眞理は他の哲學や宗教や世俗の考と趣きを異にして居るものである、眞に徹底したるものであるから、之を未曾有の法といふのである。一通り言へば總て似たやうにも考へられるけれども、又異ふ方から言へば總て違つたものとも言へる。丁度畫工に就て考へても、いろ〳〵の山水を描き或は花鳥を描いて居るとすれば、どの畫工も山は同じ山であり樹は同じ樹であるけれども、その山その樹一つ宛に皆學んで得難いやうな微妙の意味が現れて來るのである。それ故に佛教に於て說く所も同じ事ぢやと言へば皆同じ事とも言へるけれども、一々違ふと言へば皆違ふ所の尊さがあるから、それを「甚深未曾有の法を成就して」といふのである。さうして「宜きに隨つて說きたもふ所意趣解り難し」で、その奧を突いて而して應用の上に最善を盡して、そこに適當したる所の敎化を打ち立てゝ行くので、その未曾有の眞實と宜きに隨ふ方便、この眞實と方便との關係といふものが洵に了解し難い大事になつて居るのである。切れ〳〵に佛敎を學べば宜きに隨つて說いた枝葉を學ぶが故に、分裂したる佛敎となるけれども、未曾有の眞實の奧を突いてそれから出た應用の全體を達觀して見た時に於ては、一切の佛敎は統一の敎として、又總ての佛の間にも共通したる敎として、少しも分裂しないものであるが、そこまで見通すことは中々容易ではないけれども、その得難い所をやらなければならぬのである、「解り難し」と言つたから、覺ることは出來んから、引込んでしまへといふことではない、「難解」といふ言葉は「必ずそれを解せよ」といふ奬勵の言葉である、「學問は天に昇るよりも難し」といふ言葉がある、「そんな難かしいことならば天には昇れぬぢやないか、昇れないことをやらうとするのは愚であるから、始めから學問など廢めたら宜い」と言つてしまつたならば、それはその言葉を吐いた人の精神には反して居る、その言葉の意味といふものは、學問は天に昇るよりも難い位であるから、一層熱心にやらなければならぬぞといふことである、「意趣解り難し」と言つたからそんな難かしいことは御免蒙るといふやうに淨土門一流の人が法華經の斯ういふ言葉を見てけちをつけて「それ見い、難解難入ぢや、難行道ぢや、そんなものは駄目だ」といふやうなことは、文字を解釋する所の能力さへも無い者であると言はなければならぬ。斯ういふ文法といふものは誰がやつても「解り難し」といふ言葉に依つて一層熱心にそれを覺らうと奮勵する言葉である、それは何も法華經に限つた言葉ではない、東洋の斯ういふ文章の定まれる方法である。

「舍利弗、吾れ成佛してより已來、種々の因緣、種々の譬喩を以て廣く言敎を演べ」――我が釋迦牟尼に於ても佛に成つてからこちらに樣々の因緣譬喩を以て――「因緣」といふのは今の言葉にすれば實例である、いろ〳〵の實例を擧げて話をする、「何處に斯ういふお婆アさんがあつて、斯ういふケチな事をして居つた、それが斯うなつた」といふやうに實例に依つて話せば記憶し易いし、感動し易いが故に、因緣を擧げて說くのである。それから「譬喩」といふのは譬を以て判り易く說かれる、殊にこれが非常

に巧妙に出來て居る、佛教は因緣、譬諭の所に尊い意味がある、その本は未曾有の眞實を実きとめ、宜きに隨ふ應用から出て居るから、どうぞして總ての者に了解を與へたいといふ親切の爲に、種々の因緣、種々の譬諭を以て廣く教を說いた。さうして「無數の方便を以て衆生を引導して」て、樣々なる衆生に適當する所の方法を執つたけれども、その方法は前にいふ桃太郎の話の如く、或は「早く起きないと遲くなる」といふ小學讀本にあるやうな意味であるから、如何なるお經にある所の平易なるやうな事でも、それが後々までもやはり役を爲すものになつて居る。「衆生を引導して諸〳〵の著を離れしむ」て、いろ〳〵の囚はれたる精神を矯め直してやる、或は低き慾望に囚はれて偉大なる理想を有たない者、或は何等かの理由の爲に心を苦しめてその苦みより脫し得ない所の者、皆その著を離れて幸福を得せしめ、理想を高からしめて來たのである。左樣な作用は何に依つて出來たかと言へば、「如來は方便知見波羅蜜皆已に具足せり」である。「方便」といふのは前に言ふ應用の方である、「知見」といふのは眞實の方であつて、即ち應用と眞實との兩方をいふのである、方便波羅密、知見波羅密といふことで、方便と知見と兩方の波羅蜜が皆已に具足して居るといふ事である、「皆」といふのは方便と知見との二つにかけて出て居る言葉である。之を權智、實智といふので、「權實二智を敷ず」と天台は言つて居る、權智は實相に對して言へば諸法といふ現象世界に就ての知識で、應用の方になれば無量義となつて出る教、即ち無量義教となつて居るものである。それから實智の方は本體の世界を照して居るもので、諸法の實相である、實相は即ち本體の世界である、本體の世界は一妙法である、この實相本體の一妙法を照したる實智と、諸法現象の無量義となつて現れる權智が、皆一つとなつて具足せりといふことになつて、玆に大活動が起つて來たのである。

左樣な眞實と應用との上に完全なる智慧を得て居るものであるから、それ故に「舍利弗、如來の知見は廣大深遠なり」――佛が見定めをつけて「斯うだ」といふ時には、それは決して違うものではない、上には宇宙の實相を照し、下には衆生の機根を見て、その間に適當したる教を與へる、上は眞理に繫がり、下は衆生の機根に繫つてそれを淸度して行く、この大活躍といふものは到底尋常人の了解し得べきものではない。それは如來の德を語れば「無量無礙力無所畏禪定解脫三昧あつて」――「無量」といふのは所謂四無量といつて、慈悲喜捨といふ四無量心といふものを成就して居る、慈悲の上に於ても又喜と言つて自分が喜ぶばかりでなしに、善い事に贊成して行く德、捨と言つて詰らぬ事に囚はれない精神、この四無量といふ非常なえらい德がある。それから「無礙」といふのは四無礙と言つて、眞理の上にも礙なく、德の上にも礙なく、樣々の上に於て何等の拘泥、妨げを受けない自在の作用を有つて居る。それから「力」と言つても一通りの力ではない、如來の力といふものは十力と言つて十種の卓越したる力を有つて居る。それから「無所畏」も四無所畏と言つて四通りの畏れ無き所に達して居る。それから「禪定」といふのは、種々の禪定がある中に殊に第四禪定と言つて、最後の精神統一を得て居るものである。「解脫」も無上の解脫に達して居る。「三昧」といふのもあらゆる

三昧に通じて居るが故に、如何なる場合にも精神の集中統一に於ては缺けたる所の無いものである。即ち四無量、四無礙、十力、四無所畏、四禪定、無上解脫、所有三昧といふものを得て居るから、如來の人格といふものは非常なえらいものである。それが何れも「深く無際に入り」て際涯の無い所のその奥を究きとめて覺つて居る、禪定と言つても一通りのものではない、その極致に達して居るものである、慈悲もさうである、總てが皆さうである。さうして「一切の未曾有の法を成就せり」――世間の學者、宗教家、普通人の得ない所の絶對の覺の微妙なる法を得て居るものである。「舍利弗、如來は能く種々に分別して巧に諸法を說き、言辭柔軟にして衆の心を悅可せしむ」そこから出て來て衆生を教化して居るが故に、どのやうな面倒な、人の容易に說き得ないやうな崇高なる眞理でも、それを分別し說き分けて、巧に諸法を說明する、その言葉は軟らかにして、氣持ちよく、聽いて居る中に絶大の眞理を了解せしめる、平易な事だと言つて判つたと思ふ中に無限の眞理を教へる、下根上根汎ねく教ゆること一雨の總ての草木を霑し、高き松の木も小さき叢草も一樣に雨に霑ふが如くに、如來は一つの言葉を以て法を說いても、如何なる智者もこれに心服し、如何なる愚者も了解して行くやうに教化を爲すものである、その如來の教を聽いて喜ばない者は一人も無い。

斯の如き如來の大智慧から照した所の眞實の世界であるが故に、舍利弗よ「要を取つて之を言はゞ」――その智慧から照した世界はどうかと言へば、「無量無邊未曾有の法を佛悉く成就したまへり」――限りなく卓越したる法を佛は殘らず得て居る「止みな

大僧正本多日生師講述

那先比丘經通解

那先比丘經通解

本多日生

この那先比丘經は二卷でありますが、よく佛教の要領を掲げてあります。今日の佛教は頗る煩雜なるものになつて居るし、又道德と信仰との關係が、多くは二分されて居るのでありますが、この那先經に依れば佛教は頗る簡明なるものであつて、而も道德的の要素が多量に含まれて居る事を立證し得るのであります。

それに就て一二申上げたい事がある。我國の佛教に反對する議論の中に於て有力なるものは、佛教は倫理の觀念に乏しい、若くは倫理に反對して別に宗教の信仰を教へるものである、故に佛教が行はゞれば倫理は廢れると云ふのである。是は淨土宗眞宗のやうな主張が旺んになると、さう云ふ風な反對論も理由の無い事ではありませぬが、併し淨土宗や眞宗は佛教の正當教義を傳へたものでないと云ふは看易い事であつて、隨つて淨土宗や眞宗を以て佛教の代表的宗派と見るのは、さう云ふ觀方をする事ほど淺薄を表白するものであつて、甚だ憫れむべきことであります。今この簡單なる那先經に見るも佛教が頗る倫理思想に富んで居る事を證明して居るのであります。有名なる廢佛論の代表者である水戸の會澤正志齋と云ふ人が、下學邇言の中に「聖人は人倫を明か

にし、民をして其の生を樂んで父祖を念はしむ、佛氏は人倫を廢し、民をして其の生を惡んで父祖を忘れしむ」と論じて居るが、果してこの非難の如くであれば、佛教は如何にも邪教と謂はなければならぬ。人倫を廢し、國民をして厭世の觀念を起さしめ、家族主義の生命である父祖を忘れしむるものであるならば、如何にも不都合な教に相違ない。併しこの反對は全く失當の言に外ならぬ、寧ろ佛教は最も人倫を重んじ、且又現在よりして放逸を誡め、父母の恩を力説して居るものである。會澤先生は儒教の學者ではあるが、佛教に就ては全く無知識な人で、唯想像を以て佛教を罵つたに過ぎない。故にその議論は何の價値なきのみならず、却て我が文明の正統を攪亂する罪大なりと思ふ。それは今日まで諸君と共に研究を遂げた所の優婆塞戒經、心地觀經、大薩遮經等に於ても、佛教の道德的の宗教なるを立證するに餘りありと信ず。更にこの那先經に至つて一層道德的の意義明白となり、隨つて會澤先生の佛教は道德を無視し、悲觀的のものであると云ふやうな駁論は、全然失當であること如何にも分明する次第である。

それから又佛教を獨善主義であるから不都合だと論ずるものがある。獨善主義と云ふのは、自分獨り善ければ宜いと云ふので、尤もそれは物慾的ではなく人格的であつて、即ち獨り心を淨くし行を慎み純潔なる人とならうとするのである。その事は、自ら人格を磨かうとするのであるけれども、その人格が個人主義で、自分獨りが惡い事をしなければ、世の中がどうならうが國がどうならうが構はないと云ふので、今日の所謂社會性、他と共に進まうと云ふ精神が無い。自分さへ罪を犯さずして、成佛なり往生なりを遂げればそれで宜しいと云ふ風な教へでは、それは國家社會を進めて行く教化に對しては有害なるものであると云つて居る。併しこの點も佛教中の或るものは、誤つて獨善主義になつて居る所がある。是は一の宗派に限らない、油斷をすれば多くの宗派に於てその弊害があるのである。禪宗にもあらう、天台宗にもあらう、眞言宗にもあらう、日蓮主義者の中にもあらう、自分の病氣を祈り、自分の事だけ考へる信仰が隨分佛教信者の中に多い。又僧侶生活にしても、一向社會國家の爲に盡さうと云ふ考はない、精々寺でも良くしやうと云ふやうな事を考へて居る、そんな思想であるならば、是は獨善主義と云はれても致し方はないのである。併ながら、それは宗派の末に於ける誤りて、釋迦如來の教と云ふものは決して左樣なものではない。その事は矢張今迄に講じた優婆塞戒經の教にしても在家の菩薩行を力説して居るし、又この那先經に於てもそれを立證し得るのである。斯う云ふ點は明白に意識して置かなければならぬのである。今申す倫理を破るとか、獨善主義だとか云ふやうな論難が捌かれなかつたならば、全く佛教は復活することは出來ない。その意味の事を矢張り下學邇言に「佛の道は一己の小道なり、故に一身あるを知つて天下あるを知らず、世累を解脫し、人倫を棄絕し、物外に放浪して以て自恣す」と論じて攻擊をして居るのである。けれども是は嗤今言ふ通りて、決して佛教は自己一人の爲にする小さな道ではない、一身あるを知つて天下あるを知らずと言ふのではなくして、一切衆生を濟度せんとするのである。又その衆生濟度の目的の爲には、社會と調和し國家と一致してその目的を達せん

とするものである事は、後に講述する仁王經等に於て明白である。

このお經に於ては簡單明瞭に佛教の通義を明して、道德を無視したとか、獨善主義であるとか云ふ、佛教の被つた誤解を打ち拂ふ點に於て頗る明白なるお經である。餘り多くの論議を須ひずして、佛教の本質は斯う云ふものだと云ふ事を說いて居る。大體日本の人は佛教を變な具合に間違つてしまつて居る、禪宗坊主のやうに壁に向つて坐禪して居るのが佛教であるとか、淨土宗のやうに鐘を叩いて南無阿彌陀佛と言つて居るのが佛教だと思つて居る。併しさう云ふのは、偉大なる佛教を低級なる佛教に墮落せしめたのて教の罪に非らずして民族性の低劣なる罪である。教は明白であるから疑ふ餘地は無いのであるけれども、受入れる者の低級なるが故に教が低級になるのである。即ち、蛇は何を喰つてもそれが毒になる、蝮は何を喰つても皆それが毒になる、烏賊は何を喰つても皆黑い墨を叩き出す。惡い頭を通すからそれが皆低級に變つてしまふ。その點よりすれば佛教を弘めたに非らずして佛教を賊したのである。さう云ふ事を面倒な議論てなしに、お經に現れて居る表面に依つて、佛教は斯の如きものてある、そんな間違が起る餘地が無いぢやないか、と云ふ事を立證する點に於て那先經は最も有力なるお經てある。

更に申述べたい事は、陽明學に於て、極力主張して居る所に主一無適と云ふ事がある。是は陽明學の長所でありまして、一のものを以て萬事を捌いて行く、即ち一の眞心が磨かれゝば總ての道德はその中から首途して行くのてある、枝葉からして德を修めずして根本よりの德を磨いて掛る事を王陽明は主張して居る。その一は何を採つたかと云ふと誠敬てある。誠敬とは眞心てあるが、之も日本の多くの人の誤解して居るやうに、自分て勝手に考へて居る眞心てなくして、天道を敬ふ、そこに眞心が啓かれる。恰度宗教の信仰に依つて人間の眞心が導かれて來るやうな具合に、その修養の方式は、今の所謂道德的に非らずして、寧ろ宗教的の意味を持つて居るのて、誠と敬の二字を聯結して誠敬と稱して居るのてある。是は陽明學に於て明白にさう現れて居りますが、それは頗る良いことてある。このお經に於ては、陽明學て力說して居ると同じ事を一層確實に教へられて居るのてあります。このお經には六つの善事を掲げてそれが佛教の本質だと云つて居るのてありますが、その一番初めに掲げられて居るのは誠信てある。信仰のある眞心、それが一切の德の本てあると云ふ事を教へて居るのてある。陽明學の方ては、彼の傳習錄に、「世儒は惟だ此を知らず、心を舍てゝ物を逐ふ、賊を認めて子となす」と云つて居る。多くの儒者はこの眞心を磨く事を忘れて末の事から修養を積まうとして居る、それは間違つた方法てある、心の中の眞實の心は眞心てあるのに、それを忘れて唯外界に對して起る所の一時的の心、多くは物慾に導かれて起る所の心を以て自分として、例へば酒が飲みたいと云ふ心が起れば、何ても酒の餘計飲めるやうにして行く、それは賊を愛して居るやうなものてある、崇高なる信念なく、この根本的の眞心の無い者の可愛がつて居るものは、即ち低級なる慾望てあるから、それは泥棒てある、故にそれを陽明は賊を認めて子となすと云つて居るのてある。是が即ち陽明學

の眞髓でありますが、此等は皆佛教から流れて行つて居るのである。更に陽明學に於ては「唯天下の至誠にして而して後に天下の大本を立つ、念々誠敬を存すべし、敬は以て内を直くし、義を以て外を方す、敬は事なき時の義なり、義は是れ事ある時の敬なり」と云つて居る。是が陽明學の大切なる點であつて、天下に何が尊いと云へば人の至誠である、この至誠あつて世を經綸して行く大本が立つのである。今日論議されて居る問題もそれに外ならないのである。デモクラチックと云つても矢張天下の大本を論ぜんとするのであるが、それは人々の至誠を重んずるより外はないのである。念々誠敬を存すべしで、常に心を人間の眞心の方に向けて行かなければならぬ。敬即ち宗教的の信仰は、人間の心の内を淨くして行くのである、先づ以て自己の心内を淨めて掛るので、義と云ふのは、それが外に發して事をなす時分に、その働が正義に合して誤らないと云ふことになるので、内に心を正しくして働くが故に、事ある時にはその行が義に合するのである。それで敬は事なき時の義である。その義は一面から見れば事ある時の敬であつて、この敬と義とは二分されないものである。今日の言葉を以て云へば宗教と道德とは二分されない、宗教は事なき時の道德である、道德は事ある時の信仰である。斯う云ふ意味を言ひ表はしたので、非常に是は大切な言葉である。敬と義とを内と外に於て論じ、名は違ふけれどもその實に於ては相通うて居る事を明にしたのが、陽明學の凡庸ならざる所であつて、斯くして一の眞心を本として諸の道德が行はれる源となると云ふ事を論じて居るが、是が聖賢の教の妙諦であらうと思ふ。然るに斯の如き聖賢の教の妙諦が、正しく今このお經に於て、極く簡明に示されて居る。即ちその六善事を說くに當つて第一に誠信と云ふ事を掲げて居るのである。

然るに陽明學の意義と佛教の意義とは内容に於て斯くまで明白に一致して居るに拘らず、彼は佛教を學ぶこと三十年であつたが、併しどうもつまらないものだと氣付いてそれを棄てたと言つてそこに佛教排斥の口吻を漏して居る。又排斥の理由としては、恰度禪宗でやる無念無想の坐禪を凝らすやうな事に關して攻擊して居るのである。三十年も佛教を學んだと云ふが、それは禪坊さんのやるやうな事をやつて居つたのであつて、今日吾々が研究するやうに、種々なるお經に就て研究を爲し、それを綜合的に且つ統一的に、佛教の正當教義は何處に在ると云ふやうな、歸趣を觀る研究はしなかつたのである。それであるから陽明が佛教に反對したのは、佛教に反對したるに非らずして、禪宗の弊害に反對したのである。然るに日本の學者は、陽明が佛教を嫌うたと云へば、佛教がまるきり惡いと云ふ風に、粗雜な頭で考へて來たのである。然らば彼はどう云ふ意味に於て佛教に反對したかと云ふと、傳習錄に、「佛者戒懼の念を斥くるは不可なり、若し戒懼の念存せざるあらば是れ昏睡ならずや、便ち已に惡念に流入せむ、朝より暮に至り、少より老に至り、若し無念にして即ち是れ己れ知らざるを要せば、此を除いては是れ昏睡なり、除けば是れ橋木死灰ならむ」と云つて佛教を攻擊したのであるが、是は正しく禪學の病弊を指摘したものである。この言葉の意味を簡單に解釋して見れば、佛者が惡を戒め惡を懼るゝこの道德觀念を要らぬものとして、善も無く惡も無い、さう云

ふ事は氣にすることはないと云つて居る、この道德觀念を無用とするのは甚だ不都合であると斯う云ふのである。佛教に於て道德觀念を無用なりとすると云ふ事は何處に在るか。諸君が優婆塞戒經に於て、又心地觀經に於て學びしが如くに、最も良き道德を教へ、尙世間の道德は彩色に膠なきが如く、根柢が無く實行力が無い、故に之に根柢を與へ活動力を與へやうと努力するので、戒懼の念を斥くると云ふ事は何處にも無い、佛教は唯一時的の戒懼の念ではいけない、事に當つて破れるやうではいけないと云つて、完全なる倫理觀念を養はしめ、實行を導いて居る所の偉大なる經典である。その點に於ては一點の疑ひもないのである、それを疑ふは殆ど太陽の光を見ないも同じである、盲目である。然るに陽明ともあるべき者が、佛者は戒懼の念を斥ける、それが不都合だ、と云ふので攻擊の筆鋒を向けて居る、三十年の間も、善も惡もあるものか本來無一物だと云ふやうな、禪宗坊主の言ふやうな事を聞いて居つたとしたならば、隨分呑氣な爺である。そんな事を陽明が言つたからと云つて、「ハハア」と言つて、雷同して居る從來の儒者共は益々以て馬鹿者である。陽明は一方に於ては前に言ふ如く、誠敬を以て道德の根本とする事を論ずる所に於ては、如何にも高世不易の眞理を闡明して居るけれども、佛教を斥くる論點の如きはその稚劣なる實に抱腹絕倒である。後の議論はその前提が間違つて居るから問題にならぬのである。惡を止め善を作すと云ふ倫理的の觀念がなかつたならば、徒らに坐禪工風を凝して所謂無念無想、善とも惡とも考へるなと言つて居る心理狀態は殆ど坐睡をして居るも同然である。禪宗坊主の坐禪は昏

本多日生猊下著書一覽

○法華經の心髓　金壹圓六拾錢
○日蓮主義初步　金七拾錢
○日蓮主義　金壹圓五拾錢
○修養と日蓮主義　金壹圓五拾錢（品切れ）
○國民道德と日蓮主義　金壹圓五拾錢
○日蓮聖人正傳　金貳圓貳拾錢
○日蓮主義綱要　金貳圓貳拾錢（品切れ）
○日蓮聖人の感激　金貳圓貳拾錢（品切れ）
○日蓮主義の運用　金貳圓五拾錢
○東洋文明の權威　金貳圓貳拾錢
○國民教化　金貳圓貳拾錢
○法華轉　金貳圓貳拾錢
○戰士の伴侶　金貳圓貳拾錢
○思想問題の歸結と法華經　金貳圓
○聖訓要義　各卷壹部金貳圓貳拾錢
○開目抄詳解　上卷一部金貳圓八拾錢
○聖語錄　金貳圓八拾錢
○優婆塞戒經通解　金八拾五錢
○大乘本生心地觀經通解　金八拾五錢
以上各送料一部金八錢
○法華經講義　上卷下卷各一部金參圓四拾錢　送料一部金拾八錢

○大藏經要義　一部金參圓八拾錢十一卷迄既刊　送料一部金十八錢爭年前金送料不要
○法華經要文　並製金參拾錢　上製金五拾錢送料一部金貳錢
○佛教信仰の正統　金壹圓參拾錢郵稅六錢
以上購讀希望の方は左記へ申込まるべし
東京市外品川町妙國寺內
大藏經要義刊行會
振替東京三一五九六番

統一定價		
一冊	金參拾錢	送料一錢
一ヶ年	金參圓參拾錢	送料共

廣告料	
一頁	金拾圓
半頁	金六圓
四分ノ一頁	金參圓半
前金の事	

大正十一年五月廿七日印刷納本
大正十一年六月一日發行（第三百二十九號）

不許複製

編輯兼發行人　東京府荏原郡品川町南品川四百十二番地　國友日斌
印刷人　東京市神田區美土代町二丁目一番地　鈴木日雄
印刷所　東京府荏原郡品川町南品川四百十二番地　三秀舍
發行所　名古屋市中區新榮町四丁目十五番地常樂寺內　統一發行所　振替東京五一〇七二番
編輯所　統一編輯所

目次

法華經より觀たる現代思想（時言）……本多日生
釋尊の大恩……本多日生
實學……山根日東
日蓮主義より見たる無量義經……井村日咸
記事報道十數件……
法華經要文講義……本多日生
那先比丘經通解……本多日生

第廿六年七月號